



大阪大学大学院人間科学研究科

附属

未来共創センター

年次報告書 2023

Annual Report 2023

未来共創センターとは？

人間科学部は、人間についての理解を深め、人間とは何かという根本的課題と人間が営む現代社会の多様な課題を総合的・学際的に探究し、時代の要請に応えることのできる新しい学問分野の創造を目指して、昭和47年（1972年）に、「人間科学」の名称を掲げる日本での最初の学部として創設されました。人間科学部・研究科の掲げる「現場に寄り添い、課題を探り、その課題解決に向けた学際的な視点からの研究活動の成果」を学内外に発信しながら、人間科学研究科と外部の結節点となることを目指した附属未来共創センターが2016年4月にスタートしました。研究科内の教員、学生の多様な出会いと連携を生み出し、新たな学問領域の開拓を支援することも、当センターの目的です。そして、これらの活動を通して、学部学生・大学院生に向けて多様な学びの場を提供することも目指しています。さらに、2017年度からはOOS（大阪大学オムニサイト）協定を軸とする社会学連携活動も開始し、2022年度には22を超える協定が生まれました。これまでのセンターの活動が、「研究成果の社会発信」を主に目指すものとするなら、OOSによる連携・協働活動は、「社会の諸アクターとの協働を通じた共創知の創出」を試みるものです。OOSが創出する様々な「場」で人々が出会い、共感し、共生の輪が広がることを目指しています。

多様な活動を通して 社会への貢献をめざします

オリジナリティあふれる多様な活動を発信し社会貢献をめざしています。

◇人間科学セミナー／出張授業

大学内で、または大学の外で、人間科学の教員が研究成果を発信するセミナーや講義をしています。

◇「シリーズ人間科学」の発刊

研究内容を一般にも分かりやすく発信する本として、人科の教員がテーマに合わせて共同で執筆しています。これまでに「食べる」「助ける」「感じる」「学ぶ・教える」「病む」「越える・超える」「争う」「住む・棲む」の8冊が発刊されています。

◇ジャーナル『未来共創』の発刊

最新の研究や活動報告をまとめたオンラインジャーナルを、年1回発刊します。

◇研究会の運営

大学外からも参加可能な「共創知研究会」を主催しています。また、テーマを定めた研究会も実施しており、2020年度は「レジリエンス」、2021年度は「教育と格差」2022年度は「人口減少への共創的アプローチ」をテーマに、多分野の教員・学生が議論を重ねました。この研究会からの成果は特集論文として、ジャーナル『未来共創』を通じて発信していきます。

大学らしい「共創の場」から 共創知をうみだします

大学における学びや研究を充実させ、多様なアクターとともに新しい「知」をうみだします。

◇OOS 協定

産官社会学連携により、人間科学の教員とパートナーとともに、学内外のセミナーやイベントの「場」、企業・財団・社団・地方自治体・NPO/NGOなどの活動の「場」を支援・活用し、共創知をうみだします

◇オープン・プロジェクト

学系間および他部局との協働を推進し、本研究科と社会の結節点としての社会学共創活動を展開することにより、共生社会実現に向けての実践的な教育活動を図るために設置されました。現在、13プロジェクトが展開され、さまざまな社会との結び目をつくり、あたらしい場をつくっています。

◇「学生プロジェクト」

学生の自由で、独創的な発想に基づく学際性のある社会との共創的なイベント、活動を支援しています。学系を超えた交流会の開催など、学生ならではのプロジェクトが展開されています。

目 次

はじめに	1
I 未来共創センターの概要	
1 設立の経緯と背景	2
2 活動目的と概要	3
3 運営体制	3
II 活動報告	
1 センター主催のイベント	
1.1 人間科学セミナー	4
1.2 学生企画によるプロジェクト	11
2 OOS	
2.1 OOS 協定	16
2.2 OOS 関連イベント	18
2.3 OOS シンポジウム	22
3 オープン・プロジェクト	
3.1 オープンプロジェクトの活動	27
4 研究事業	
4.1 研究事業	45
4.2 ジャーナル『未来共創』の発刊	46
5 教育事業	
5.1 未来共創センター担当授業	47
5.2 『私の一冊』の発刊	48
5.3 講義の感想	48
6 その他の活動	49
III OOS 協定活動からの お知らせ	
青い酒募金のお願い	50

概要

センター主催のイベント

OOS

オープンプロジェクト

研究事業

教育事業

その他の活動

OOS協定活動
からの
お知らせ

はじめに

2023 年度の附属未来共創センター年次報告書が完成しました。

2023 年度には、ウクライナにおける戦争、ガザ地区への侵攻の暴力、そして能登半島での震災が大きく社会に刻まれました。これらの出来事はとりも直さず、学際性・国際性・実践せいを謳う人間科学研究科そして社会学共創をミッションとしている未来共創センターの実践と関わってくるものです。

未来共創センターとも深くかかわる人間科学研究科の活動としては IMPACT プロジェクトとして、オーブンプロジェクトと OOS 協定がともに拡大したことが挙げられます。IMPACT オーブンプロジェクトは、新たに社会的インパクト指標の開発を目的とした実装型として4事業を選択し、従来の公募型の17事業と合わせて21と、前年度よりも8件増えました。OOS 協定については新たに2団体との締結があり計24団体となり、さらに充実しております。これらの活動を支えてくださった各外部団体の皆様、そして教員や学生の皆様に感謝申し上げます。

さらに震災に伴って IMPACT 能登の活動も始まっており、来年度からは OU マスタープラン活性化 A「社会学共創による Wellbeing で Inclusive なキャンパスづくりの全学展開に向けた試行」が始まります。

報告書制作に当たってくださった木村友美先生、事務補佐員の矢野公子さん、そして未来共創センターの活動を支えてくださった OOS 協定、オーブンプロジェクトを支えてくださった学内学外のみなさま、杉本めぐみ先生に御礼申し上げます。

附属未来共創センター
センター長 村上 靖彦



1 未来共創センター設立の経緯と背景

人間科学部は、人間についての理解を深め、人間とは何かという根本的課題と人間が営む現代社会の多様な課題を総合的・学際的に探究し、時代の要請に応えることのできる新しい学問分野の創造を目指して、昭和47年（1972年）に、「人間科学」の名称を掲げる日本での最初の学部として創設されました。4年後には大学院も設置され、当初から設置されている人間科学専攻（4学系：行動学系、社会学系、人間学系、教育学系）と2007年に大阪大学と大阪外国語大学の統合によって設置されたグローバル人間学専攻（1学系、：グローバル人間学系）の2専攻5学系体制で、教育研究を展開してきました。

しかしながら、現代社会の急激な構造変動とそれに伴う人間生活の本質的な変化の中で、人間科学部・研究科が創設以来、最重要視してきた「自らの専門領域を深化させながら、俯瞰的な視点を持って、異なる学問領域との多様な連携と融合を実践する学際的な教育・研究活動」をさらに推し進めなければならないと認識するに至りました。そこで、2016年に本研究科では従来の2専攻5学系体制から、1専攻4学系体制に改編することを決定しました。具体的には、人間科学専攻のなかに、行動学系、社会学・人間学系、教育学系、共生学系の4学系としました。

新組織としての人間科学専攻には、新しい学問領域としての「共生学」が加わりました。今日の多様化する社会においては、紛争、大規模災害、環境汚染、貧困、高齢化、格差などあらゆる問題が生じ、人々の間に、あるいは社会に様々なレベルでの軋轢を生みだしています。それゆえに、「人種、民族、言語、宗教、国籍、地域、ジェンダー、セクシュアリティ、世代、病気・障がいなどの違いを有する人々が、その違いを認めながら、共に生きること」である「共生」を学際的に研究する「共生学」の構築を、本研究科は目指すことになりました。

本研究科は、従来から、国内外の大学や研究機関との国際共同研究や、学内の他部局との共同研究を積極的に展開し、「現場に寄り添いながら、文理融合的で学際的な研究活動」を展開してきました。この機能を一層強化するため、2016年の新体制への移行に際して、本研究科と大阪大学他部局、国内外の大学・研究機関、NPO・NGO等多様な団体、さらには市民社会をつなぐ「結節点」として、本研究科内に「未来共創センター」が設置されました。

2022年には、人間科学部は創立50周年を迎えました。



大阪大学大学院人間科学研究科

附属 未来共創センター

2 活動目的と概要

本センターは、本研究科教員の個別の学問領域における研究の機能強化だけでなく、異なる研究領域の研究者との接触や協働を通して、新たな融合的学問領域の展開と、国内外の現場に寄り添った実践的な教育研究活動の実現を目指します。

学部学生や大学院生は、本センターが企画・運営する公開講座、セミナーやまなびのカフェ、さらに学術図書の企画・出版等の事業に参加することで、研究成果の一般社会への還元方法やコミュニケーション力・対話力の向上、及びプロジェクトの企画・運営能力などの実践的能力を身に着けることが期待できます。さらに、2017年度からはOOS（大阪大学オムニサイト）協定を軸とする社会学連携活動も開始し、「社会の諸アクターとの協働を通じた共創知の創出」を目指しています。

3 運営体制（2023年度）

《未来共創センター構成員》

未来共創センター

村 上 靖 彦 教授 [センター長] (兼)	篠 原 一 光 教授 (兼)
澤 村 信 英 教授 [副センター長] (兼)	稲 場 圭 信 教授 (兼)
杉 本 めぐみ 准教授 [副センター長]	白 川 千 尋 教授 (兼)
木 村 友 美 講師	高 田 一 宏 教授 (兼)
小 泉 空 特任研究員	佐 藤 貴 宣 招へい研究員
川 渕 千恵子 特任事務職員 (2023年7月まで)	
矢 野 公 子 事務補佐員 (2023年10月～)	

未来共生イノベーター博士課程プログラム部門

榎 井 縁 特任教授	平 尾 一 朗 特任助教
田 川 千 尋 特任講師 (常勤)	佐々木 美 和 特任助教
伊 藤 莉 央 特任助教 (常勤)	鈴 木 ひでみ 特任事務職員

1 センター主催のイベント

◆1.1 人間科学セミナー

大阪大学人間科学研究科の教員らによるセミナーで、一般にも広く公開しています。今年度は、第59回から第64回までの6回のセミナーが開催されました。

日付	時間	タイトル	氏 名	場 所
2023 年 7 月 27 日	17:00ー 18:30	第59回 人間科学セミナー 新任の先生の研究紹介	高橋 哲 近藤 和敬 玉城 明子 杉本 めぐみ	ラーニングコモンズ
2023 年 9 月 14 日	16:30ー 17:30	第60回 人間科学セミナー 心をデザインする！ 教育支援デジタルクローン 共同研究講座セミナー	伊藤 庸一郎 平井 啓 ほか、ゲストによる基調講演	ラーニングコモンズ
2023 年 10 月 27 日	11:00ー 19:00	第61回 人間科学セミナー 「ここに共感する汎用 AI ビジネス」GPT+多重 persona によるデジタル クローンが寄り添う情報 社会システムの未来	伊藤 庸一郎 平井 啓 ほか、ゲストによる基調講演	中之島センター
2024 年 2 月 29 日	15:10ー 16:40	第62回 人間科学セミナー 【最終講義】 日常的錯視の心理学： 化粧と服装は見た目を本 当に変えるのか？	森川 和則	第 207 講義室+Zoom
2024 年 3 月 12 日	15:30ー 17:00	第63回 人間科学セミナー 【最終講義】 心理学から統計学ただし 行列分解へー変遷中のエ ピソードを中心にー	足立 浩平	第 207 講義室+Zoom
2024 年 3 月 19 日	14:00ー 17:00	第64回 人間科学セミナー 【最終講義】 「最終講義」という名のコ ンサート&語り合いー 「ともに生きる場」をみん なで創るー	千葉 泉	第 51 講義室 +Zoom

公教育の危機としての教員多忙化問題 —教師はなぜ「しんどい仕事」になったのか?—

講演者 高橋 哲 准教授 / 教育学系

<要旨>

教師の多忙化が、教師の労働問題、教育問題にとどまらず、社会問題となっている。学校の「ブラック化」は、若者の教員離れを引き起こし、教師のなり手不足、教員採用倍率の低下を生み出し、「公教育の危機」ともいえる状況を生み出している。その要因として、「給特法」という法律の存在がクローズアップされてきた。給特法は、給料月額 4 % の教職調整額という独自手当を支給する代わりに、労働基準法が定める超勤手当を支払わない、という特殊な仕組みを教員に適用している。それゆえ、この法律は「定額働かせ放題法」とも揶揄され、批判の対象とされてきた。学校の先生たちの仕事は、なぜこれほどまでに「しんどい仕事」となってしまったのか? この講演では、その歴史的、法的背景を明らかにするとともに、多くの問題が指摘される「給特法」を徹底的に解剖する。教師が子どもの成長と向き合う仕事であり続けるために、あるべき「出口」を参加者とともに考えたい。



フランス・エピステモロジーから人類史の哲学へ

講演者 近藤 和敬 准教授 / 共生学系

<要旨>

発表者のこれまでの研究概要を、フランス・エピステモロジーから人類史の哲学へと展開していく過程として紹介する。そのことを通して、最近のエピステモロジー研究の動向と、社会哲学としての側面への注目といったトピックをあわせて紹介していく。

フランス・エピステモロジーとは、現代フランス哲学の一潮流であると同時に、19 世紀フランスのオーギュスト・コントに始まる実証主義哲学の系譜でもある。発表者の研究は、この系譜の二〇世紀的展開である「概念の哲学」(カヴァイエス)を中心として、戦後フランスの現代哲学におけるその影響関係(たとえば、カンギレム、アルチュセール、シモンドン、ドゥルーズ、フーコーなど)を明らかにする一方で、その背景的文脈にある実証主義とスピノザ解釈の歴史的影響関係を解明するものでもある。最終的にこのような研究が、人類史の哲学というかたちでより広い現代的関心とどのように結びつけられることになるのかということを簡単に紹介することにしたい。



教師の指導観が授業づくりに与える影響 —教師が授業で子どもに問うことの再評価—

講演者 玉城 明子 准教授 / 教育学系

<要旨>

授業における教師の問いかけはどのように追究されてきたのか、一問一答形式や唯一の正答を求めるような問いではなく、教師の問いは子どもへの応答として構想され、その教師の問いが子どもの問いを生み出し、さらに新たな問いが教師や他の子どもたちの応答を生み出していく。教師が問うことは、子どもに、または子ども同士にどのような影響を及ぼすのか、教師と子ども、子ども同士を相互主体のかかわりへと発展するための問いを整理した上で、こうした生成的な空間として展開する授業を支える指導観について着目する。

授業において教師の問いかけはなぜ必要かについて、学力保障の観点から、とりわけ授業づくりに関する教材研究と発問づくりの意味や働き、相互の関係を踏まえつつ、どのような教材-発問づくりを進めていくのか事例を含めて検討したい。



シナリオ地震による日本の災害対策の問題とコミュニティ防災

講演者 杉本 めぐみ 准教授 / 未来共創センター

<要旨>

南海トラフ巨大地震の防災対策を最重点に置く災害対策は、毎年起きている豪雨で激甚災害指定を受けている日本の状況に対し、しっくりこないと感じておられる方もおられるのではないのでしょうか。

マグニチュード 9.2 の 2004 年スマトラ沖地震津波で壊滅状態だったインドネシア・アチェで取り組んで来たコミュニティ防災 (Community Based Disaster Management) から見える日本の防災対策の問題、東大地震研究所在職時に起きた東日本大震災と南海トラフのシナリオ地震の防災対策問題、ユネスコで取り組んだ温暖化と水災害リスクマネジメント、日本で一番原発に近い国立大学で学際研究と防災教育に全学の災害研究者で取り組んで来たこと等。研究者としてだけでなく防災教育の実践家としての取り組みについても報告します。阪大に着任してから学内の研究チームに入って現在取り組んでいる大阪府の津波防災調査についても紹介し、課題も提起します。



教育支援デジタルクローン共同研究講座オープニングセミナー

講演者 吉田 たかよし／本郷赤門前クリニック院長、浜学園・教育顧問
 平井 啓／大阪大学人間科学研究科
 伊藤 庸一郎／大阪大学人間科学研究科、浜学園・デジタル教育顧問

主 催 大阪大学大学院人間科学研究科 未来共創センター
 人間科学研究科 教育支援デジタルクローン共同研究講座

<要旨>

2023 年 4 月から人間科学研究科初めての共同研究講座が立ち上がりました。それに伴い、共同研究講座の概要や活動を広く知ってもらうため、2023 年 9 月 14 日にラーニングコモンズにて、「心をデザインする！教育支援デジタルクローン共同研究講座オープニングセミナー；人間科学と AI のコラボレーション」を開催しました。

村上靖彦未来共創センターセンター長によるセミナー開催の挨拶を皮切りに、平井啓准教授から本共同研究講座の設置背景、講座の目的や取り組みについての概要をお話いただきました。続いて、本共同研究講座の伊藤庸一郎特任教授より人に寄り添う AI 生成プラットフォーム「Thinkeye」についての概要と実践例を中心に解説していただき、本共同研究講座において人間科学と AI がどのようにコラボレーションし、社会に貢献できるかについての展望をお話いただきました。

講演後の質疑応答では、人間科学研究科教職員の疑問や質問、意見についてうかがい、本講座教員とフロアの先生方とディスカッションをし、今後の実践可能性や実装する中での懸念点やその対応について議論を深めることができました。



村上先生による開催の挨拶



平井先生による講座の紹介



伊藤先生によるデジタルクローンの紹介

ここに共感する汎用 AI ビジネス；GPT+多重 persona によるデジタルクローンが寄り添う情報社会システムの未来

講演者 吉田 たかよし／本郷赤門前クリニック院長、浜学園・教育顧問

平井 啓／大阪大学人間科学研究科

伊藤 庸一郎／大阪大学人間科学研究科、浜学園・デジタル教育顧問

主催 大阪大学大学院人間科学研究科 未来共創センター

人間科学研究科 教育支援デジタルクローン共同研究講座

<要旨>

2023年4月から人間科学研究科初めての共同研究講座が立ち上がりました。それに伴い、共同研究講座の概要や活動を広く知ってもらうため、2023年10月27日に中之島センターにて、「ここに共感する汎用 AI ビジネス；GPT+多重 persona によるデジタルクローンが寄り添う情報社会システムの未来」を開催し、本講座のお披露目をしました。

本共同研究講座の伊藤庸一郎特任教授より本講座の設立に至るまでの経緯、講座の活動や AGI（汎用 AI）生成技術「Thinkey」の概要をお話いただき、Thinkey によるビジネス実践と展望についてご講演をいただきました。また基調講演では、同講座の平井啓准教授によりメンタルヘルス領域におけるデジタルクローンの意義について、浜学園グループの教育顧問であり、各種メディアでご活躍されている吉田たかよし先生より、心的ストレス・「うつ」に向けてテラーメイドに診断するデジタルクローンのビジネス有用性やデジタルクローン第1号のドナー（思考の模倣元）となる吉田先生の展望についてご講演いただきました。

そして教育、介護、医療、芸能、開発など各業界で活躍されている企業の方にもゲストスピーカーとしてご参加いただき、Thinkey を用いたビジネス展開や各業界の現状に応えたデジタルクローンの有用性についてご講演をしていただきました。



伊藤 庸一郎 先生



平井 啓 先生



吉田 たかよし 先生

日常的錯視の心理学：化粧と服装は見た目を本当に変えるのか

講演者 森川 和則 教授／人間行動学講座

<最終講義>

森川和則先生は、視知覚の基礎プロセス（明るさ知覚、運動知覚、テクスチャ知覚、奥行き知覚など）、錯視、顔の知覚、心的回転、視点取得、損得判断、ギャンブル心理などの幅広い研究を行うとともに、企業と共同して基礎研究を応用に生かすことにも尽力されてきました。

最終講義では、ご自身が行われた多くの実験結果に基づき、化粧にかかわる錯視や服装にかかわる錯視について体系的に紹介されました。リモートを含めて60名以上の参加者を前に、時間いっぱいまで熱のこもったご発表をいただきました。

<略歴>

1983年東京大学文学部心理学科を卒業後、1986年同大学院人文科学研究科修士課程修了（心理学修士）。1988年にフルブライト奨学金を得て米国スタンフォード大学心理学部大学院に留学し、1993年心理学博士号（Ph.D.）を取得した。カリフォルニア工科大学、ラトガーズ大学、ニューヨーク州立大学で研究を続けた後、帰国。1999年小樽商科大学商学部教授、2004年大阪大学大学院人間科学研究科教授。2008年からは大阪大学社会経済研究所兼任教授。G30プログラム（後に人間科学部英語コース）には創設当初から深く関わり、英語による授業を毎年提供した。

大阪大学大学院人間科学研究科
基礎心理学研究分野
附属未来科学センター第62回人間科学セミナー

森川 和則 教授 最終講義

日常的錯視の心理学：
化粧と服装は見た目を本当に変えるのか？

2024年2月29日（木）15:10～16:40

会場：東館第207講義室（ユメンスホール）
オンライン配信（Zoom）

会場へお越しの方は、東館1階を問合し入場ください、2階までお越しください（事前申込不要）。
オンライン参加をご希望の方は、下記URLまたは右の二次元バーコードからお申し込みください。
当日、入室時QRコードURLをお送りします。
<https://forms.gle/LshWUdHnL1tLkUXVA>
お問い合わせ先 入野野郎 (nitono@hus.osaka-u.ac.jp)




【最終講義】

心理学から統計学ただし行列分解へー変遷中のエピソードを中心にー

講演者 足立 浩平 教授／行動統計科学講座

<最終講義>

足立浩平先生は、心理学で広く利用される多変量解析法の新たな方法の開発やその理論的性質の解明に関する研究を行ってこられました。特に近年では、行列分解因子分析モデルの開発、および、主成分分析と因子分析との関係性の解明に力を注がれています。最終講義では、関わりのある多くの方々の紹介を交えながら、ご自身の在学中からご退職までの半生を振り返られました。

<略歴>

1982年京都大学文学部心理学専攻卒業。1998年京都大学大学院博士号（文学）取得。科学警察研究所研究員、甲子園大学助教授、立命館大学教授などを経て、2005年大阪大学大学院人間科学研究科に教授として着任。研究テーマは、心理統計学、多変量解析法など。



大阪大学 大学院 人間科学研究科
行動統計科学講座 教授 足立 浩平
附属未来科学センター 第63回人間科学セミナー

足立 浩平 教授 最終講義

心理学から統計学ただし行列分解へー
変遷中のエピソードを中心にー

2024年3月12日（火）
15:30～17:00

対面会場：大阪大学（吹田キャンパス）人間科学部
2階 207 講義室（ユメンスホール）
<https://www.hus.osaka-u.ac.jp/ja/cocosa.html>

オンライン会場：Zoom
以下のURLまたは右のQRコードからお申し込みくださいと
後日、Zoomのアクセス先をメールでお知らせします。
お申し込みは2024年2月22日（木）までにお願います。
<https://forms.gle/A9PFmR6MGvbmRD1B7>
お問い合わせ先 山本義生 (yamamoto.michio@osaka-u.ac.jp)




「最終講義」という名のコンサート&語り合い
ー「ともに生きる場」をみんなで創るー

<最終講義>

千葉泉先生は、ラテンアメリカの地域研究者として、ラテンアメリカの音楽やチリ先住民であるマプーチェの歴史と文化について研究をされてきました。それと同時に、音楽を通したコミュニケーションや「自分らしさ」を活かした教育も進められてきました。35年以上にわたる研究者としての人生、そして、教員としての人生は、千葉先生の「自分らしさ」をめぐる試行錯誤の歩みでもありました。大学の統合や組織の改変といった環境の変化に加え、身体的・精神的困難に苛まれる中で、「強い自分らしさ」ではなく「弱い自分らしさ」を受け入れ、それを研究や教育に活かしていく過程がさまざまな音楽と語りを通して再構築される最終講義となりました。千葉先生のこれまでの歩みを思い出し、知り、それを新たに始まる「ともに生きるための歌（ともいきうた）プロジェクト」へと紡いでいく場面に立ち会うことができ、非常に光栄でした。コンサートと語り合いという型破りな最終講義は、これまでの千葉先生への感謝とともに今後への希望に溢れる、千葉先生ならではの音楽的コミュニケーションの集大成であったと思います。

1984 年東京大学大学院社会学研究科修了。チリでの留学から帰国し、大阪外国語大学に着任。その後、大阪大学との統合を経て、大阪大学大学院人間科学研究科教授。主な業績として、「音楽を感じる」（入野宏・綿村英一郎編（2019）『シリーズ人間科学 3—感じる』大阪大学出版会、pp.239-267）、『“研究者失格”のわたしが阪大でいっちゃんおもしろい教授になるまで一弱さと向き合い、自分らしく学問する』（明石書店、2019）、『みんなで書く本—語り合い・綴り合い・支え合い—』（千葉・額田・立野・仲村・伊藤編（2023）、千葉研究室）などがある。また、著書のタイトルにあるもあるように、2017 年に大阪大学生協学生委員会が発行する機関紙『Handai Walker』で実施されたアンケートにおいて「大阪大学でいっちゃんおもしろい教授」に選ばれている。



◆1.2 学生企画によるプロジェクト

学生主催のイベントです。「学生プロジェクト」を通じて新しいつながりを生み出しました。

日付	タイトル	企画者・話題提供者
2023 年 4 月 16 日	さぼちむ：ボードゲーム大会	ふうか、他
2023 年 5 月 14 日	さぼちむ：ボードゲーム大会	ふうか、他
2023 年 7 月 29 日	人科 50 周年記念学生プロジェクト 参加型アート「結ぶ、繋ぐ、結いなおす」	田邊 匠、湊谷 純子、FU YUE、 YUN YAJING、YANG HANYI

さぼちむ：ボードゲーム大会 ①

実施日時：2023 年 4 月 16 日（日）10:00-16:00

参加者数：合計 25 人

運営側：主要メンバー 3 人、学生 2 人

参加者：20人

参加者の内訳：留学生 6 人、小中学生 7 人、
学生 4 人、大人 3 人



○実施内容（敬称略）

グローバルビレッジ津雲台のコミュニティスペースにて、ボードゲームを使った交流イベントを開催した。ボードゲームの内容は、トランプを使ったカードゲーム（ウノ、ババ抜きなど）、麻雀、人生ゲーム、人狼ゲーム、ワードウルフ、なんじゃもんじゃなど多岐にわたった。また、参加者の持ち込みを可能としていたため、留学生が一人では遊べなかった人生ゲームを、その場で通訳しながら留学生と子供たちで遊ぶ場面も見られた。特に、なんじゃもんじゃは盛況で、留学生、小中学生、学生、大人の 10 人程度で同じテーブルを囲み、言語や年齢を超えた交流を楽しんでくれていた。



イベント内では、今後どのようなイベントがあったら嬉しいか、何か日常で困っていることはないか聞き取りを行った。その結果、子どもと大人（家族）が一緒に遊べるようなイベントが嬉しい、身体を動かせるようなイベントがよい、日常で困っていることは特になく、留学生と住民、学生との交流をもっとしたい、というようなご意見をいただいた。参加者同士の交流がより進むように、今後のイベントのアイデアに取り入れつつ、私達さぼちむの存在意義を考える糧としていきたい。

○プロジェクトの考察

これまではグローバルビレッジの中でも、居住スペースの一角にあるコミュニティラボさんを実施場所としてきた。しかし、本イベントにおいては、初めてグローバルビレッジ津雲台の留学生も住んでいる寮に場所を移しての実施だった。その結果、留学生の参加が約 1/3 を占めるなど増加した。さらにこれまでのイベントに参加して下さった常連の方が、寮のスペースへ入っていくことで、寮の学生と住民の間の物理的な距離感をなくすことができたのではないだろうか。



「なんじゃもんじゃ」の盛り上がりはとても印象的だった。ゲームの内容としては、カードをめくって出てきたキャラクターにあだ名をつけ、もう一度同じカードを引いたときに、一番早くその名前を言った人が勝ちというものだ。非常にシンプルかつ、使用する単語も限られているので、それぞれが得意とする言葉以外でも暗記力さえあれば、カードをもらうことができる。そのため、多世代、多文化の交流が容易だったと考えられる。今後も、言葉や年齢による差がないようなゲーム、交流の方法を考案していきたい。

また、これらのゲームに参加できないほどの幼い子の場合は、母親と学生と一緒にあやとりをして遊ぶ場面もあった。このように、小さなニーズにも対応できるような運営体制を整えることで、訪れた方々全員に満足してもらい、また遊びに来たい場所として私たちのチームを認識してもらえるのではないだろうか。今後も、地域のニーズと私たちのやりたいことをうまくマッチングさせながら、緩やかにつながり、ちょうどよい距離感でつながりあうコミュニティづくりの一端を担っていきたい。

(文責：ふうか)

さぼちむ：ボードゲーム大会 ②

実施日時：2023年5月14日（日）10:00-16:00

参加者数：合計 30 人

運営側：主要メンバー 2 人、学生 2 人

参加者：25人

参加者の内訳：子ども（中学生まで）16 人、
学生 4 人、大人 6 人



○実施内容（敬称略）

グローバルビレッジ津雲台のコミュニティラボにて、日本のボードゲームとジェスチャーゲーム、カードゲームなどを使って住民同士の交流を促進した。ボードゲームはサービス付き高齢者住宅よりお借りした。今回のイベントでは、マスク着用についての方針が大きく変わって初のイベントかつ、ろうのメンバーが運営側に参加してくれていたことも相まって、「声出しなし」で楽しめるゲームを集めて行った。イベント中は、親子での参加がほとんどで、子どもの年齢層も 2 歳～14 歳まで幅広かった。また、今回のイベントでは通りから覗いて参加してくれたご家族や、参加まではいかずともお声掛けできた方が 10 人以上だった。

また、実施場所付近にあるコーヒーショップが火事になってしまったため、その募金活動とドリンクの提供も行った。

○プロジェクトの考察

今回のイベントでは、残念ながら留学生の参加がなく、学生の参加も少なかった。内容が子供向けに捉えられたのかもしれないため、広報を工夫する必要があると感じた。一方で、親子連れの参加者はリピーターと新しい参加者が半々程度であり、私たちの存在が少しずつ認識されているようだ。チップにもそれは表れているようで、今回は参加者の大人の人数に対して、いただいたチップの値段が大変高く、期待と応援を実感することができた。

また、先述の通り、今回は外から眺めてから参加してくれた方もいた。これは、メンバーの一人が俯瞰できたことで、興味を示している人に話かけに行くことができたことが功を奏したのではないだろうか。

さらに、今回はサービス付き高齢者住宅にゲームをお借りすることができたことで、担当者の方とお話しする機会を得て、来月はイベントのスペースをお借りすることが決定した。



今後はサービス付き高齢者住宅のシニアの方々とも交流を深められるように工夫しつつ、リピーターの方にまたリピートしてもらえるように企画していきたい。

(文責：ふうか)

REPORT【学生プロジェクト】人科50周年記念学生プロジェクト 参加型アート「結ぶ、繋ぐ、結びなおす」

実施日時：2023年7月29日（土）13:00（12:40 受付開始）-17:00

※2023年6月15日から7月14日の間でメッセージを募集

実施場所：インターナショナル・カフェ（人間科学研究科本館1階）

参加者数：学生メンバー2名、外部講師1名、

同窓会生・在学生・教職員21名（計25名）

企画者：田邊 匠、澁谷 純子、FU YUE、YUN YAJING、YANG HANYI

○本企画の目的

本プロジェクトでは、参加型アートへの参加および制作を通して、人間科学部／研究科（以下、人科）に縁がある者（在学生および卒業生、教職員等）が相互に交流し、記念碑を作り上げる機会を提供する。本プロジェクトを通して、卒業後に疎遠になってしまった卒業生と在学生・教職員の縁を結びなおす。そして、アート制作を通じて国籍・言語・文化を越えて、在学生同士や、在学生・教職員と卒業生同士を新しく結び、繋げていくことを目的とする。

また常時、作品を展示し、訪れた人々がアート制作に参加できる永遠に未完の作品とすることで、これからの人科を全員で創造していくという意味を込めた。人科生を迎え、送り出す存在として愛される

ような、そして在籍した証を残すことで卒業後も人科に思いを馳せることができるような新しいシンボルとなることを目指した。



当日のタイムテーブル

12:40	受付開始
13:00-13:10	研究科長の渥美公秀先生からのご挨拶
13:10-13:40	人科創立50周年記念事業委員長の篠原一光先生による銘板披露
13:40-14:00	休憩
14:00-14:30	本プロジェクトの報告
14:30-15:00	外部講師の川島茂雄様との座談会
15:00-17:00	参加型アートの実施
17:00	解散

○実施内容

本プロジェクトは、昨年度に採択・実施された「人科 50 周年記念学生プロジェクト」の続きである。昨年度は、真竹と人科棟前に生育している孟宗竹を活用し、「人」の文字を模したオブジェを制作した。新しく「学生プロジェクト」として採択された今年度は、プロジェクトの区切りとして、これまでの道のりや作品に込めた願い・展望を広く知っていただくための報告会・座談会と、竹のオブジェに色とりどりの毛糸を結んでいく参加型アートを主目的とした最終イベントを実施した。なお、イベントは、学生プロジェクトを進行役として、同窓会事務局ならびに人科創立 50 周年記念事業委員会との共同で開催され、その関連から研究科長の渥美公秀先生からのご挨拶および人科創立 50 周年記念事業委員長の篠原一光 先生からの銘板披露も行われた。



本プロジェクトの報告では、企画のアイデアが形成される過程で参考にした、人科と竹の関係性や人科棟の形に付与された思いといった話題から始まり、本作の意図、2月のイベントの様子、そして今後の展望を発表した。また、外部講師の川島茂雄様（竹工芸作家）からは、本作のモデルとしている「OPAM の輪」などの竹かご編みを応用した作品と参加型アートについて語っていただき、参加者が本作への理解を深める機会となった。このように参加者に作品の成り立ちを知っていただいた後、オブジェに毛糸を結ぶ参加型アートを実施した。本プロジェクトでは、参加型アートへの関与について「呼びかけ」「アート作成」「常設展示」の3段階を想定していた。「呼びかけ」段階では、様々なコミュニティのつながり、たとえば、在学生から研究室の卒業生に連絡をとることを通して、Google フォームにメッ

セージを送っていただく。その後、コミュニティごとに毛糸の色を指定し、収集した情報をもとに、コミュニティ間で連絡を取り合えた数から結ぶ毛糸の数を算出した。また、送られたメッセージは短冊にして、オブジェに飾った。イベントでは、「呼びかけ」段階で算出した毛糸と短冊に加えてイベント用の毛糸を、在学生および同窓生、教職員とともに、オブジェに結んだ。



○プロジェクトの考察

昨年度のイベント後に作品を展示し、さまざまな媒体を通じて情報を発信していたため、学内における認知度は高まってきた。イベント前のメッセージ募集期間およびイベント当日では、在学生や同窓生、教職員の方から協力を得ることができ、イベント当日は猛暑の中、遠方から駆けつけていただいた方もいらしかった。本プロジェクトの報告会では、さまざまな世代が入り混じる中、人科生という共通の話題で互いの交流を図ったことで、作品の企画意図をより鮮明に伝えることができたと分析する。川島様との座談会も報告会との関連を意識したものを事前に依頼していたため、参加者にとっても参加型アートを深く学び、本作への向き合い方や表現を考える契機になった。実際、最後の参加型アートでは、参加者間で談笑が生まれ、また制作を行うなかで、作品の今後を話し合う機会に恵まれたことは、人科の輪を形成する一歩になったのではないかと考える。発足当初、最終イベントは学生プロジェクト単体で行う予定であったが、こちら側の提案で、50周年記念事業委員会の銘板披露と共同で開催する運びとなり、次年度にまたがったものの、記念事業の一環として節目を迎えることができたことは幸甚であった。

本プロジェクトは、創立50周年という新たな出発点に、これからの人科を、現在・未来における人科の構成員とともに創造していくための提案である。そのため、私たちが蒔いた種が、どのように芽吹くかは、数年後・十年後の人科に委ねられるだろう。作品の材料となった孟宗竹は、しっかりとした根を張り、遠い場所でも株を出し、枯れても種を残し新しい株をつくるそうだ。歴史と伝統から学び、成長と再生を繰り返しながら、未来を切り開いていくことができる人科となることを切に願う。

最後に、附属未来共創センターの杉本先生、川渕様を始め、同窓会事務局や50周年記念事業委員会、教務・会計系の皆様には、温かいお言葉や特別なご支援をいただき、また、同窓会の皆様からは、オブジェの制作費として追加のご支援をいただいた。心より御礼申し上げます。そして、プロジェクト開始からこれまで指導してくださった川島様に深く感謝申し上げます。

(文責：田邊 匠)

2 大阪大学オムニサイト協定 OOS

大阪大学オムニサイト（OOS）は、2017年4月新たな共創の仕組みとして始動しました。産官社会学連携により、学内外のセミナーやイベントの「場」、企業・財団・社団・地方自治体・NPO/NGOなどの活動の「場」を支援、活用します。OOSが創出する様々な「場」で人々が出会い、共感し、共生の輪が広がることを目指しています。OOS協定を活用し、これまでに様々なプロジェクトが実施されました。

◆2.1 OOS協定：2022年までに締結された協定と2023年度新たな協定 (締結日順)

一般社団法人全国自治会活動支援ネット	一般社団法人全国寺社観光協会
一般社団法人今井町大和観光局	岩手県九戸郡野田村
パナソニックホームズ株式会社（旧パナホーム）	新安世紀教育安全科技研究院
NPO 法人北いわて未来ラボ	NPO 法人日本災害救援ボランティアネットワーク
ジャトー株式会社	NTN 株式会社
ダイハツ工業株式会社	一般社団法人タウンスペース WAKWAK
大阪市教育委員会	共和メディカル株式会社
中銀インテグレーション株式会社	西予市野村地域自治振興協議会
愛媛大学社会共創学部	NPO 法人おおさかこども多文化センター
一般社団法人地域情報共創センター	大阪トヨタ自動車株式会社
吹田市社会福祉協議会	一般社団法人パースペクティブ
タマパック株式会社	株式会社日本電商

2023年度新たな協定

タマパック株式会社と株式会社日本電商

2023年7月28日大阪大学人間科学研究科にて大阪大学ユネスコチェア MeW（ミュー）プロジェクトは、タマパック株式会社、並びに株式会社日本電商と「大阪大学オムニサイト（OOS）」協定の調印式を行いました。タマパック株式会社は、パッケージメーカーとして、印刷紙器、段ボールケース、その他の包装資材の製造販売や製造資材の輸出入等の事業を展開されています。株式会社日本電商は防災防犯や住宅設備に関わる電設資材・設備機器の卸売をされています。二社同時に大阪大学オムニサイト協定を結びました。

新協定関係者、学生と教員、人科の事務職員、大阪大学ダイバーシティ&インクルージョンセンター教員が揃い、調印式が行われました。大阪大学人間科学研究科附属未来共創センター 現副センター長の杉本めぐみ准教授から開会の宣言があり、大阪大学人間科学研究科研究科長渥美公秀教授より OOS 協定を結ぶことによる社会学共創の促進及び、協定先同士がまた連携していくことの期待を述べられました（写真1）。



（写真1）協定書に調印後の渥美研究科長



(写真2) 協定担当の杉田教授

国際的には10年ほど前から、月経対処が個人ではなく社会の課題だという認識がされはじめまして、今やグローバルな課題となっています。日本でもコロナ禍で「生理の貧困」が、社会課題と認識されたのは記憶に新しいかと思います。

ディスペンサー開発の検討をする中で、設置しやすいこと、例えば壁にかけられる機能や、学校や被災地などでの利用後の廃棄の問題を考えると、ダンボールが良いだろうということになりました。またとても重視したのが、生理用品に選択肢があることです。ナプキンは2種類、タンポン

を1種類入れることで自分の体と向き合うチャンスにもなるということで選択肢があるところを重視して、この形がいいなということになりました。

ダンボール会社さんを大阪内でいくつかあたらせていただいた時に、HPなどを見て、タマパック様が良いなということになりまして、意気投合し、ディスペンサーを今の形にするには一緒に試行錯誤を繰り返しました。

最初、人間科学研究科内で設置したところ、単に便利というよりも『寄り添ってもらっている感じがする。』という反響があり、全学に広げたいということになりました。そしてダイバーシティ&インクルージョンセンターのご協力のもと、大阪大学の全キャンパスで導入になりました。

現在は約35の団体で1700から1800台が設置されています。もっと広げていくにあたってハードルを感じている中で今年の春、日本電商さんからご連絡をいただきました。生理用品ディスペンサーのトイレ内での普及をご検討されていることを伺い、一緒にやらせていただきたいということで、本日に至りました。

本日、署名という形で関係性が結ばれることで、月経のある人のウェルビーイングの向上に向けて協働し、ひいてはそれが社会のウェルビーイングの向上にもつながるというふうに私たちは考えております。OOS協定で今後私たちの取り組みが推進されていくことを確信しています。本当に今日はありがとうございます。また各代表から、以下のような所信表明をいただきました。

タマパック株式会社執行役員 北村公宏 様

「お招きいただき感無量です。我々の仕事は、皆様が頭の中で描いたものを、実際形として作るということだと痛感しております。思うものを設計図には描けても実際それが完成したものになるかどうかというところが、一番難しいところです。実際いろんなお客様からご要望があった時に、いかにお客様のご要望にほぼ100%近いものを作って形にするかが仕事だと考えています。ダンボールのエコという強みを活かして、環境問題とか、はたまた震災の問題とかに対応して、ダンボールのベッドとか、コロナでのパーティションとか、簡易トイレをダンボールで開発を進めていますし、今後も皆さんと一緒にいろんなものがご提供できれば、より良い社会に貢献できると考えておりますので、今後ともどうぞよろしくお願い致します。」(写真3)



(写真3) タマパック株式会社 北村様

株式会社日本電商代表取締役社長 山中一晃 様

「4年前社長に就任するときに、SDGsを会社の経営方針に取り入れました。商売をする上で、お客さんも仕入れ先もちろん弊社の方も、全てがよしという考え方。これにプラス、世間良し。この「三方よし」の精神を取り入れたいとした時に、世間に対して何ができるのか、と考えたときに「生理の貧

困」という問題が出てきました。まずは自社で取り入れてみようということで日本電商のトイレの中にはこのディスペンサーを設置しております。もちろん、無償でトイレットペーパーと同じような形で誰もが使える状態にしております。

学生の方々はコロナの3年間、もやもやした期間を過ごしたのではないのでしょうか。そのような中でも一步一步このような形で着実に製品化して販売網を着実に増やし、世間良しという考えた方のもと、進まれていったことに甚だ感服している次第でございます。今日は調印式後にも皆さんとの交流の機会があるともお聞きしておりますので、いろんな当時の話も聞かせてもらえたらと思います、本日はありがとうございました。」(写真4)



(写真4) 株式会社日本電商 山中様

最後に、未来共創センター長の人間科学研究科村上靖彦教授より、協定締結の感謝とともに、MeWプロジェクトの取り組みが社会実装に至ったことの重要性と今後協定先同士でより良好な関係性を持つことへの期待を述べられ、調印式は締め括られました。会場には、MeWプロジェクトの学生メンバーや支援してきた事務職員、D&Iセンターからも含め多くの女性の方にご参加いただき、これまでにない雰囲気での調印式になりました(写真5)。



(写真5) 協定後の関係者集合写真

◆2.2 OOS 関連イベント

日付	タイトル	主催等	開催場所
2023年 5月13日	がいなんよ大学 in のむら 第11講「飲む村のむらの酒祭り」	愛媛大学社会共創学部 野村地域自治振興協議会 NEOのむら	西予市の野村町 乙亥会館
2023年 5月21日	さきしま健康まちづくりフェスタ』 出展：「宝さがし防災まち歩き」	共創ラボ@SAKISHIMA 一般社団法人地域情報共 創センター NTN 株式会社	ミズノエンジン
2023年 7月8日	大阪大学共創DAY@EXPOCITY 2023 『未来社会を創造中！』出展：「防災たんけん隊の試み」	大阪大学産学連携・NPO 法人日本災害ボランティア ネットワーク	ららぽーと EXPOCITY
2023年 7月8日	がいなんよ大学 in のむら 第12講「デジタル技術×まちあるき座談会」	愛媛大学社会共創学部 野村地域自治振興協議会 NEOのむら	西予市野村町 本家緒方蔵

2023 年 7 月 13 日	第 1 回縮退社会研究会 アイスブレーキング	縮退社会ラボ	オンライン
2023 年 7 月 28 日	2023 年度 OOS 2 社同時協定調印式	ユネスコチェア MeW プロジェクト タマパック株式会社・株式会社日本電商	人間科学研究科
2023 年 8 月 30 日	第 2 回縮退社会研究会 リアルスケール社会シミュレーションの可能性 (サイバーメディアセンター 村田忠彦教授)	縮退社会ラボ	サイバーメディアセンター
2023 年 9 月 17 日	ぼうさいこくたい 2023	一般社団法人地域情報共創センター	横浜国立大学
2023 年 9 月 17 日	がいなんよ大学 in のむら 第 13 講「緒方洪庵×まちあるき構想」	愛媛大学社会共創学部 野村地域自治振興協議会 NEO のむら	西予市野村町 本家緒方蔵
2023 年 9 月 19 日	2023 年度第 1 回野田学講義 「ビッグデータで社会心理を知る」(三浦麻子教授)	野田村、復興まちづくり ラボー野田村	久慈工業高校 (オンライン)
2023 年 10 月 15 日	『おおさき防災フェスタ』 出展:「防災まち歩き」	おおさき防災フェスタ実行委員会 認定NPO法人こども食堂 支援センター・むすびえ 一般社団法人地域情報共創センター	居木神社
2023 年 10 月 19 日	第 3 回縮退社会研究会 「尊厳ある死」をめぐる言説構造とその罫 (鳥取大学 安藤泰至准教授)	縮退社会ラボ・尊厳ある 縮退同好会	人間科学研究科
2023 年 11 月 9 日	「宗教施設におけるこども食堂と防災」セミナー	認定NPO法人全国こども 食堂支援センター・むす びえ 公益財団法人浄土宗とも いき財団 公益財団法人全日本仏教会 大阪大学大学院人間科学 研究科附属未来共創セン ター IMPACT 一般社団法人地域情報共 創センター	増上寺
2023 年 11 月 12 日	『ふくしまてんこもりEXPO 2023秋』 出展:「防災まち歩き」	大阪トヨタ自動車株式会社 一般社団法人地域情報共 創センター	福島公園
2023 年 11 月 12 日	がいなんよ大学 in のむら 第 14 講「働き方への考え方が変わる! ? - 「マルチ ワーク」について学ぼう」	愛媛大学社会共創学部 野村地域自治振興協議会 NEO のむら	西予市野村町 本家緒方蔵
2023 年 11 月 16 日	2023 年度第 2 回野田学 NTN (株) 製作のエヌキューブの活用方法を検討する (NTN (株) 勝又龍介技術部長、赤川充主査)	野田村、復興まちづくり ラボー野田村	久慈工業高校
2023 年 11 月 19 日	『第 3 回 GV フェス』 出展:「防災まち歩き」	パナソニックホームズ株 式会社 共和メディカル株式会 社 中銀インテグレーション 株式会社 一般社団法人地域情報共 創センター	グローバル ビレッジ津雲台
2023 年 11 月 27 日	2023 年度第 3 回野田学 AI 時代の学校教育 (西森年寿教授)	野田村、復興まちづくり ラボー野田村	野田村 コミュニティハウス

2024 年 1 月 29 日	第 6 回大阪大学オムニサイト協定 シンポジウムにて能登半島地震募金活動	附属未来共創センター 西予市野村地域自治振興 協議会・愛媛大学社会共 創学部 日本災害救援ボランティア ネットワーク	銀杏会館
2024 年 1 月 30 日	野田村の復興に関する学生との意見交換	野田村、復興まちづくり ラボー野田村	人間科学研究科
2024 年 2 月 11 日	『さきしま まちづくりフェスタ』 出展：「宝さがし防災まち歩き」	共創ラボ@SAKISHIMA 一般社団法人地域情報共 創センター	N-LOUNGE
2024 年 3 月 5 日	災救マップ アップデート報告会	「災救マップ」プロジェ クト 一般社団法人地域情報共 創センター	人間科学研究科
2024 年 3 月 17 日	がいなんよ大学 in のむら 第15講「能登半島地震緊急報告と災害時における 「外部ボランティア」」	愛媛大学社会共創学部 野村地域自治振興協議会 NEO のむら	西予市野村町 どすこいパーク
通年	復興支援酒「緒方洪庵」の販売	NEO のむら	

活動報告

2023 年 7 月 8 日

大阪大学共創 DAY@EXPOCITY 2023『未来社会を創造中！』

出展：「防災たんけん隊の試み」

by NPO法人日本災害ボランティアネットワーク

リサーチアシスタント：西村 尋

OOS 協定 NPO 法人日本災害ボランティアネットワークは、本年度未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクト（スタートアップ型）「災害ボランティアラボ」を開始しました。その活動の一環として 2023 年 7 月 8 日ららぽーと EXPOCITY にて開催された大阪大学共創 DAY に出展しました。大阪大学共創 DAY は、体験イベント、ミニレクチャー、展示などを通して、大阪大学のさまざまな研究成果や、社会課題を発掘・解決する「共創」の取り組み、そして、その先に創造する未来社会の姿を紹介するイベントです。子どもから大人まで多くの皆さまと、科学・研究・学術の魅力を楽しみながら学び合うイベントで、今年は阪大から 19 機関が出展しました（写真 1, 2）。



（写真 1）



（写真 2）

「災害ボランティアラボ」は、「防災たんけん隊の試み」として、主に子どもをターゲットとしたクイズラリーを行ったほか、防災グッズや保存食の展示、長野市内での災害ボランティア活動紹介を行いました（写真3）。

メインである全6問のクイズラリーの中には、専門的な内容もあり、難しいように思われましたが（筆者は1問正解でした…）、参加者の多くの方に全問正解も見られ、答え合わせの時は参加者の方々と毎回、盛り上がりを見せていました。

参加者は、主に親子での多くご参加いただいたほか、若者や外国の方など、さまざまな方と交流することができました。その中でラボの活動を知ってもらったり、防災への意識を新たにしたりすることができたのではないのでしょうか。また、クイズラリーの景品でもらったお菓子を片手に、防災アニメにかじり付く子どもの様子も見られました（写真4）。あまりに夢中な様子に思わず笑みがこぼれ、その場が和やかなムードになりました。アニメを通じて、子どもにも馴染みやすい展示ができたのではないのでしょうか。こうした誰もが関心を持ち、楽しみながらも学べるコンテンツがあると、防災の取り組みもより発展する可能性があることを実感しました。



（写真3）



（写真4）

企画者の1人であるNPO法人日本災害救援ボランティアネットワーク常務理事の寺本弘伸さんにお話を聞かせていただきました。寺本さんは、「大人より子どもさんの方が長生きする分、災害に遭う可能性は高いと思う」とした上で、「子どもさんとか、何に対しても興味を持っている世代にこそこの防災の取り組みの大事さを、体験を通じて知ってもらうこと」を大事にしており、今回のような経験が将来にわたって生かされていくことの期待を語ってくださいました。今後も未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクト「災害ボランティアラボ」はこうした防災や減災、災害復興に向けた活動を継続していきたいとのことです。

未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクトでは、現場や人々と関わり続ける中で、新たな共創知を生み出すプロジェクトを支援し、より良い社会に向けて協働し続けていきます。

◆2.3 OOS シンポジウム

REPORT

「第6回大阪大学オムニサイト協定シンポジウム ーポストコロナ1年の今とこれから」

日時：2024年1月29日（月）13:30-16:30

場所：大阪大学吹田キャンパス銀杏会館

主催：大阪大学大学院人間科学研究科 附属未来共創センター

プログラム

- 13:30 第1部 開会宣言：村上靖彦 附属未来共創センター センター長（総合司会）
- 13:33 田中敏宏 大阪大学統括理事・副学長よりご挨拶
- 13:40 渥美公秀 人間科学研究科長よりご挨拶と活動紹介
- 13:55 新 OOS 協定のご紹介 協定担当：杉田映理教授
- 14:05 OOS 協定団体ご紹介（各1分）と第2部ワークショップについて
杉本めぐみ 附属未来共創センター 副センター長（担当司会）
- 14:30 休憩
- 14:40 第2部 ワークショップ ーポストコロナ1年の今とこれから
（ワールド・カフェ形式：ファシリテーター学生）
- 16:15 田中敏宏 大阪大学統括理事・副学長よりご講評
- 16:20 福田祐一 大阪大学理事・副学長よりご講評・ご挨拶
- 16:28 人間科学研究科より参加お礼のご挨拶 西森年寿 人間科学研究科副研究科長
- 16:33 閉会の辞 村上靖彦 センター長
- 16:35 終了後懇親会場（銀杏会館2階ミネルバ）へ移動
- 17:00 懇親会 於ミネルバ 司会：西森年寿 副研究科長
乾杯 金田安史 大阪大学統括理事・副学長
- 18:30 閉会

【OOS 協定 24 団体の本日参加団体様より各団体のご紹介文】

一般社団法人 全国自治会活動支援ネット

我が国古来の歴史を再確認し培われてきた伝統文化と豊かな自然環境に立脚し、各地の自治会組織をベースにしつつ新しい時代に相応しい「地域コミュニティモデル」を日本ブランドとして確立し、もってあまねく人類の平和に貢献します。

一般社団法人 今井町大和観光局

奈良県橿原市今井町は重要伝統的建造物群保存地区として、全国屈指の規模と集積度を誇っています。その町で私たちは、今井町住民に歴史講座を開講し、今井町に関する文献を収集して出版する活動を地道に続けています。

岩手県九戸郡野田村

豊かな自然と太平洋に囲まれた野田村は、岩手県の北東部に位置しています。昔ながらの製法で作

られる「のだ塩」、外海で育てられたプリプリの「荒海ホタテ」、滋養強壮に良いとされる「山ぶどう」などが特産品です。

パナソニック ホームズ株式会社（旧パナホーム）

2018 年、OOS に民間企業として初の連携協定締結を行い、大阪大学様との PFI 事業である『グローバルビレッジ津雲台』をフィールドに GCP 組織で活動を展開しております。大学職員・海外留学生及び民間施設の居住者を対象にイベント等を通じて、コミュニケーション醸造の研究フィールドとして活用しております。

新安世紀教育安全科技研究院（在四川省成都市）

NPO 法人 北いわて未来ラボ

北いわて未来ラボは 2011 年の東日本大震災の直後に集まり活動を始めたグループで、翌 2012 年に NPO 法人となりました。以後、被災地における防災教育イベントや地域おこし事業等に取り組んでいます。

NPO 法人日本災害救援ボランティアネットワーク

阪神・淡路大震災時に西宮に発足した NPO です。災害救援を中心に、日頃の防災・減災啓発活動にも取り組んでいます。1 月 1 日に発生した令和 6 年能登半島地震でも支援活動を行っています。どうぞよろしくお願いいたします。

ジャトー株式会社

NTN 株式会社

NTN 株式会社は 2018 年に創業 100 年を迎えたベアリングメーカーです。培った技術を活かして、風力や太陽光を用いた防災減災と地域創生に貢献する商品を開発し、「なめらかな社会」の実現を目指しています。

ダイハツ工業株式会社保健センター

一般社団法人タウンスペース WAKWAK

タウンスペース WAKWAK は前身の市民運動をもとに 2012 年に非営利型の一般社団法人として大阪府高槻市富田地区において設立。「ひとりぼっちのいないまちをつくる - 社会的包摂をめざすまちづくり」をキーワードに子どもから高齢者までの切れ目のない支援をめざした多種多様な事業を行っています。大阪大学さんとは OOS 協定をもとに地域において地域・家庭・学校・行政・企業・大学など多様なセクターが共創する多セクター共創プロジェクト（座長 志水宏吉先生）を創設し、社会的不利を抱える層を取りこぼさないまちづくりを協働して行っております。

共和メディカル株式会社

ジェネリック医薬品と医療機器を販売する「ジェネリック医薬品販売事業」、大阪府、和歌山県でかかりつけ薬局を目指す「薬局事業」を柱に、さまざまな事業を行っています。OOS 協定を通じて、グローバルビレッジ津雲台のまちづくりの取り組みや、人間科学部の授業での講師協力などで関与させて頂いています。

中銀インテグレーション株式会社

弊社はグローバルビレッジ津雲台でサービス付高齢者向け住宅を運営しています。高齢者の活躍の場作りをテーマに、特に入居者と学生、地域住民との交流に取り組み、阪大生・留学生との交流イベント等を積極的行っています。

愛媛県西予市野村地域自治振興協議会

野村地域では、平成 30 年 7 月豪雨災害がきっかけで大阪大学の方々とご縁ができました。田舎において大学が縁遠くありましたが、現在では、大学の学生や先生方との連携が深まり、災害復興、地域活性化に大きな力となっております。引き続きよろしくお願いいたします。

愛媛大学 社会共創学部

西日本豪雨の被災地である愛媛県西予市野村地区にて大阪大学人間科学部の方々と一緒に復興活動の支援を行っています。地域の方々とともに、まちづくりのワークショップや防災まちあるきのアプリ開発など様々なプロジェクトを実施してきました。

NPO 法人おおさかこども多文化センター

一般社団法人 地域情報共創センター

一般社団法人地域情報共創センターと申します。大阪大学で「未来共生災害救援マップ」（通称「災救マップ」）、独立電源通信システム（愛称「たすかんねん」）の研究開発を進められてきました。これらのプロジェクトが研究してきた社会課題解決の実装を行うべく設立されたのが当法人です。引き続きよろしくお願いいたします。

大阪トヨタ自動車株式会社

当社は「お客様と共に、社員と共に、社会と共に」という経営理念のもと事業を展開し、2027 年には 100 周年を迎えます。これからも地域の皆さまに寄り添った事業活動を続け、お客様に選んでいただける企業でありたいと考えています。

吹田市社会福祉協議会

誰もが安心して暮らせる住みよいまちづくりを目指して、身近な地域福祉活動やテーマに沿ったボランティア活動を推進しています。また地域課題・個人の生活課題等を地域住民、福祉関係機関、大学、行政等と検討する場をコーディネートしています。

タマパック株式会社

タマパック株式会社と申します。この度は、第6回未来共創センター OOS シンポジウムへ参加できましたことを大変嬉しく思っております。弊社は、紙器や段ボールといった紙製品をはじめ、その他包装資材の製造販売をしております。通常の段ボールケースから化粧箱、ディスプレイ等でご依頼がございましたらぜひご相談くださいませ。

株式会社日本電商

弊社、株式会社日本電商は、電気設備の総合卸売業を生業としております。弊社では、4 年前から生理の貧困に対し会社として何か出来ることはないかという取り組みから始まり、色々な出会いを経て、大阪大学様とのつながりが出来ました。皆様のお力添えを頂きながら、社会に生理用品がトイレットペーパーと同じような感覚で利用できる環境作りに貢献してまいりたいと考えております。

「第 6 回大阪大学オムニサイト協定シンポジウムーポストコロナ 1 年の今とこれから」報告

附属未来共創センター長 村上 靖彦

人間科学研究科附属未来共創センター「第 6 回大阪大学オムニサイト協定シンポジウムーポストコロナ 1 年の今とこれから」は 2024 年 1 月 29 日曜日、吹田キャンパス銀杏会館において 13 時から 16 時半にわたって開催された。

オムニサイト協定の 21 団体のうち 18 団体からご参加いただき、参加者は人間科学研究科教員、スタッフ、学生ボランティアも含めて 81 人だった。

当日は、開会宣言のあと田中敏宏大阪大学統括理事副学長のご挨拶をいただき、渥美公秀人間科学研究科長から挨拶およびオムニサイト協定の活動報告があった。



田中統括理事より挨拶と司会村上センター長



渥美研究科長より挨拶と会場の様子

プログラム前半は新 OOS 協定のご紹介として、MeW プロジェクトの協定担当杉田映理教授から、タマパック株式会社、株式会社日本電商との協定についての紹介があり、生理用品配布のための紙製のディスペンサーの開発についての詳しいお話をいただいた。世界における女性の生理と貧困を巡るさまざまな状況、試行錯誤を繰り返した開発の苦労、および現在 MeW プロジェクト参加学生とともに全学や大阪府内の学校などで行っている女性トイレでの無償の生理用品配布活動についての説明があった。



ディスペンサーの説明を休憩時間にしている杉田教授



新しい協定先 タマパック株式会社 森川氏

未来共創センター副センター長杉本めぐみ准教授からオムニサイト協定の 21 団体の紹介があったあと、休憩をはさんで第 2 部では、オムニサイト協定企業や理事副学長も含めて参加者一同が、8 グループに分かれてワールドカフェ形式のグループワークを 3 巡おこなった。学生ボランティアのファシリテーションのもとでポストコロナそして最後のターンでは 1 月 1 日に起きた能登半島の震災もテーマに組み込んでのグループワークは、はじめ皆さんに緊張した様子もあったもののすぐにうちとけておおいに盛り上がり、多様な団体が交流する場である OOS シンポジウムでつながりを作るきっかけとなった。



学生をファシリテータにワールドカフェ形式の議論の様子



院生による各グループ総括の報告

企業・自治体・災害や外国人支援などの NPO 団体・大学といった普段出会うことがない人たちが交流を深める機会にすることができた。コロナ禍によって失われたコミュニケーションの場をどのように回復させ、オンラインも駆使して新しい場所を作るかということが大きな議論の軸となったように思う。

皆さんの会話がとまらない様子ではあったが、終了時刻となり、田中敏宏統括理事副学長、福田祐一理事副学長から講評をいただき、オムニサイト協定への大きな期待をいただきながら西森副研究科長のクロージングでにぎやかに会は締めくくられた。



田中統括理事副学長



福田理事副学長

この場をお借りして、ご参加いただいたオムニサイト協定の参加団体の皆様、田中統括理事、福田理事、交流会に駆けつけて頂いた金田安史統括理事副学長に御礼を申し上げるとともに、サポートして下さった学生ボランティアの皆さん、綿密な準備を頂いた杉本先生と未来共創センター事務補佐員の矢野公子さんに御礼を申し上げます。



閉会挨拶をする西森副研究科長



役割を確認し各自持ち場に付いて出迎える学生たち

3 未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクト

「社会学共創活動を展開することにより、共生社会実現に向けての実践的な教育研究活動の強化を図る」という未来共創センターの目的に沿い、2020年度人間科学研究科教員のボランティアな意思にもとづいてオープンプロジェクトを開始しました。教員が自発的に組織する社会学連携・社会学共創活動を支援しています。2023年度から未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクトとして、大阪大学全体に公募を拡大しました。今年度は社会実装型（5年）4件と、スタートアップ型（3年）17件の計21プロジェクトが採択されました。

社会実装型プロジェクト（5年まで）			
1	復興まちづくりラボ 野田村	2	生野区における多文化まちづくり活動における社会学共創プロジェクト
3	グローバルビレッジ・コミュニティ・プロジェクト（GCP）	4	MeW プロジェクト（月経をめぐるウエルビーイングの研究と実践）
スタートアップ型プロジェクト（3年まで）			
1	Ethnography Lab	2	災害ボランティアラボ
3	心理・行動フォーサイトラボ PBL-F	4	子どもの安全ラボ
5	老いと死の研究ラボ	6	緒方らぼ
7	哲学の実験オープンラボ	8	地域の食とプラネタリーヘルス
9	全国人間科学系部局の連携と活動継続化	10	縮退社会ラボ
11	災間社会ラボ	12	みんなのフィールドエソロジーラボ
13	記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ（記憶の継承ラボ）	14	プロジェクト SOUP（Share Our Unique Perspectives）
15	Tsunami DRR（Disaster Risk Reduction）Lab.	16	対話で進めるディスアビリティ・インクルージョン
17	多様性の中のウエルビーイング		

◆3.1 オープン・プロジェクトの活動

◎復興まちづくりラボ 野田村 担当教員：渥美 公秀

社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：5件

1. コミュニティラーニングの開講
8月19日から27日まで野田村において「コミュニティラーニング」を開講した。
2. 野田学の展開
大阪大学大学院人間科学研究科教員2名が講義を行った。



3. 大阪大学への“短期留学”

野田村職員 4 名が 1 月 30 日に大阪大学人間科学研究科を訪問しコミュニティラーニングを振り返りに関する集会を開催した。

4. 能登半島地震に関する情報提供

3 月 11 日東日本大震災 13 年となる行事の中で、能登半島地震の現状を報告し、ラボとしての活動を打ち合わせる（予定）

◎生野区における多文化まちづくり活動における社会学共創プロジェクト

担当教員：CO デザインセンター ほんまなほ

社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：3 件／参加者 100 人

大阪市生野区における多文化共生、少子高齢化などのさまざまな課題に取り組むために、大阪大学と地域が協働するプラットフォーム「いくのふらっとだいがく」を活用し、大阪大学の大学院生・修了生と地域住民の交流を促進するための未来共生セミナー、CO デザインセンター開講科目「マイノリティ・セミナー」受講生による生野コリアタウンまちあるき、水俣のひとびとの暮らしを歌う柏木敏治さんを招いた「猪飼野ちいさな音楽祭」を開催し、文化創造という点から生野と複数地域を横断する文化イベントを実施した。生野区のみならず、上記の活動に参加した受講生が、同様の課題をかかえる西成区・釜ヶ崎の住民と交流を重ねながら、マイノリティの表現のもつ豊かさを発信するための文化イベント、「カマとティアのキケンな関係」と「カマボール 2024」の企画と実施に参画し、分断されがちな属性や集団をこえて、社会で協働するための文化実験をおこなった。



「カマボール2024」
参加者のパフォーマンス



「カマボール2024」
全員参加のラストシーン



「猪飼野ちいさな音楽祭」
柏木敏治さんの演奏

◎グローバルビレッジ・コミュニティ・プロジェクト（GCP）

担当教員：稲場 圭信

ウェブサイト：<http://patona-suita-tsukumodai.jp/>

社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：4 件／参加者 1,300 人

- ・GCP 会議、GV 津雲台まちづくり協議会の会議
- ・グローバルビレッジ津雲台のオープン 3 周年記念イベント

「第 3 回おもしろい学（あそ）び場グローバルビレッジフェス」を開催した。日時：11 月 19 日。

グローバルビレッジ津雲台の各テナント、大阪大学関係者、留学生をはじめ子どもからお年寄りまで、幅広い世



代に喜んでいただけるイベントの数々で、大盛況のうちに楽しい時間を共有した。

- ・人間科学研究科共生学系の実験実習Ⅰのフィールドとして GV を活用。上記のフェスなどにもスタッフとして参加。
- ・「グローバルビレッジ津雲台食事交流イベント」参加者各人がお国自慢の食べ物を持ち寄り、パーティーを行った。

開催日時：2023 年 10 月 7 日(土)

場 所：グローバルビレッジ津雲台 コミュニティスペース

- ・大阪大学のインカレサークル「いなせもん」による、よさこいダンスイベント

開催日時：2023 年 7 月 2 日(日)

場 所：グローバルビレッジ津雲台 広場



◎MeWプロジェクト 担当教員：杉田 映理

ウェブサイト：<https://mewproject-osaka-u.jp/>

社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：5 件／参加者 400 人

国際シンポジウムの件数と参加人数：1 件／参加者 90 人（予定）

① ディispenserの普及に係る実証研究

下記について、D&I センターの協力を得て実施した。

- ・大阪大学内の全学 MeW ディispenserの Map 化
- ・デジタル技術を用いた大学内モニタリングの仕組みづくり構築（生理用品の常備体制強化）
- ・学内ユーザーのオンラインアンケート
- ・D&I センターの取組みについての聞き取り



② 産学連携の推進

- ・ディispenserの製造および販売の体制構築、OOS 協定の締結
- ・ディispenserのイベント用への改良の議論
- ・グッドデザイン賞への申請

③ 大阪万博へのディispenser導入の検討

- ・大阪大学万博推進室との連携、協働
- ・万博協会、各パビリオン関係者との協議
- ・万博プレイベントへの参加 2 回、万博でのプレゼン機会の獲得
- ・ロータリークラブでのプレゼン 2 回

④ 避難所への運用の検討および実践

- ・7 月および 12 月に月経 x 防災のワークショップ開催
- ・能登半島地震避難所へのディispenser設置

⑤ 国際女性デーにあわせた国際シンポジウムの開催（3 月 9 日予定）



◎Ethnography Lab, Osaka 担当教員：森田 敦郎

ウェブサイト：https://loftwork.com/jp/event/20231110_diy-energy_exhibition
<https://fabcafe.com/jp/events/kyoto/20231220-spcs-talks-vol-6/>
https://loftwork.com/jp/project/20231221_ur_morinomiya_fieldwork
<https://peatix.com/event/3552479?lang=ja>
https://loftwork.com/jp/event/20240302_tlc-meetup3

社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：8 件／参加者 560 人

大学院向け授業を継続して実施し、その内容に基づく一般向けの教育プログラムを大阪大学フォーサイト（本学の 100%子会社）に提供、同社の主催によって実施した。

デザインとエスノグラフィ、人類学の知見を融合して持続可能性の問題を考える「DIY エネルギー人類学」プロジェクトを（株）ロフトワークと実施し、建築、住宅、デザイン、エネルギーなどの企業関係者と交流した。

京都工芸繊維大学とデザイン、建築、人類学の方法論の融合をめぐる共同研究を継続して実施。そのプロジェクトの中で、バンコクとニューヨークから来日した建築学研究者と共同セミナーを実施したほか、ロフトワーク、UR と共同でフィールドワーク、講演会等を開催した。

◎災害ボランティアラボ 担当教員：渥美 公秀

ウェブサイト：下記のNVNADブログにて報告

<http://www.voluntary.jp/weblog/myblog/1544>

社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：4 件／参加者 1,500 人

■大阪大学共創 DAY にブースを出展

7 月 8 日（土）、吹田市のエキスポシティ内で開催された大阪大学主催の「共創 DAY」において、「防災まち歩き」と「災害食の展示」を実施した。また、災害ボランティアによる「被災地のリレー」をテーマに展示パネルで研究報告も行った。



■シンポジウムの開催

9 月 2 日（土）、11 月 11 日（土）、1 月 20 日（土）の日程で日本災害救援ボランティアネットワーク（NVNAD）と共催で、西宮市民会館にて連続のシンポジウムを開催した。テーマはそれぞれ「地区防災計画」「災害食と SDGs」「被災地のリレー」で、阪神・淡路大震災以降の災害支援活動での教訓を、広く市民に伝える目的で開催した。2025 年 2 月まで計 8 回実施予定。

■防災パーク@そねちか

11 月 25 日（土）・26 日（日）2 日間、大阪梅田の地下街にて南海トラフ地震や高潮災害をテーマ

に、防災ウォークラリーや災害食の展示、避難所の体験や停電時の避難体験など、防災啓発のための様々なプログラムを実施した。

■よりそい隊を通じて防災ウォーキング

11月26日（日）吹田市の五月が丘地区にて、地元の福祉委員会や吹田市社会福祉協議会等との共催で、認知症予防のアプリを活用した「防災まち歩き」を実施した。

■人科内備蓄の目的で、折り畳み式のヘルメット（おさめっと）や非常食（えいようかん）を試験的に購入した。ヘルメットに関しては、能登半島地震での支援活動において実際に活用した。

◎心理・行動フォーサイトラボ 担当教員：三浦 麻子

ウェブサイト：<https://pbl-f.hus.osaka-u.ac.jp/>

社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：2件／参加者60人

5月に第3期メンバーを募集して、人間科学部3年生からD2生、そして社会人（第1期生）までバリエーション豊かな10名でPBL活動を実施した。6月の第1回ワークショップでは、心理学を社会に活かすというラボ活動の目的を共有した上で、社会問題解決のための企画・コンセプトを作り込んでいくプロセスのフレームワークを体験的に学んだ。その後は3つのグループに分かれて、「めんどくさい対策」「難易度の高い認知課題・リテラシーの獲得」「効果的な掲示・Notification」という、共通点を持ちつつ異なる目標を目指す3つの社会課題に取り組んだ。各課題で概念整理・仮説設定を行って調査を計画し、8月と11月にもステイクホルダーである鉄道会社からの参加も得たワークショップで経過共有・意見交換を重ねながら、1月に一般市民対象のWeb調査を実施した。そして3月にIMPACT活動推進支援経費の助成を受けて報告会を実施し、各課題の調査結果について報告・議論を行った。



◎子どもの安全ラボ 担当教員：中井 宏

ウェブサイト：NHK大阪「知ってる？こどものキケン」

https://www.nhk.or.jp/osaka/kodomo_kiken/

小学館サイト

hug-kum <https://hugkum.sho.jp/422962>

Gakken サイトこだてまっぷ

<https://kosodatemap.gakken.jp/life/together/42044/>

社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：1件／参加者8人

2020年5～6月に大阪大学未来基金「クラウドファンディング基金」寄付金募集実施プロジェクトとして資金を集めた子どもの安全啓発本について、2023年度末の完成を目指し、最終作業中である。

また大阪府立豊中高等学校能勢分校において実施してきた自転車安全教育
(<https://www.town.nose.osaka.jp/soshiki/soumuka/seisakusuishin/oshirase/7652.html>) について、その効果を測定するためのループリック作成の可能性を探ってきたが、学校教諭らとの議論の結果、纏まった知見を得るには至らなかった。

この他、以下のような、子どもの事故防止のための啓発・実践活動を進めている。

■委員・講演・研修等

- ・京都府教育庁 学校安全教室指導者講習会 講師
- ・奈良県交通安全母の会連合会指導者研修会 講師
- ・大阪大学医学部保健学科「学校保健学」 ゲストスピーカー
- ・大阪市ファミリーサポートセンター援助会員養成講座 講師
- ・大阪府福祉部子ども家庭局主催保育者研修 講師
- ・教育保育施設における送迎バス安全管理研修
(兵庫県、奈良県、滋賀県) 講師

■教材等監修

- ・NHK大阪製作動画
「知ってる？こどものキケン」アドバイザー
- ・ナブテスコ株式会社主催
「自動ドア安全教室」イベント企画アドバイザー
- ・2022年度に大阪書籍印刷と開発したカードゲーム
「デンジャラ ZOO」を 2024 年度の商品化に向け監修

■メディア出演

- ・NHK大阪ぐるっと関西おひるまえ出演 7歳の交通事故、子どもの誤嚥事故について
- ・NHKニュースウォッチ9出演 河川の安全について
- ・日経新聞、NHK大阪取材対応



◎老いと死の研究ラボ 担当教員：権藤 恭之

社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：2件／参加者20人、200人



おいともの風景



劇の風景

今年度は、若者と高齢者の交流事業として、伊丹市において「おいとも」を実施した。また、学術交流として2023年6月21日 Bar-Ilan University の Ehud Bodner 教授、2023年7月26日 The University of Edinburgh の Alexander Weiss 教授、2024年1月17日北京師範大学の Wei LIU 准教授、を招き、それぞれエイジズム、性格と長寿、テクノロジーに関する講演会を開催した。

また、研究交流の拡大を目指し、国立台湾大学および京丹後市を訪問した。

インパクトの活動の外ではあるが、人間科学研究科と共催で第17回日本応用老年学会を開催した。その懇親会で車いすを使った立体ディスプレイを用いた演劇を上演し好評を得た。

◎緒方らぼ 担当教員：川端 亮

ウェブサイト：<https://nomuraneo.wixsite.com/>

社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：5 件／参加者 およそ 400 人

2023 年 5 月 2 日	朝霧湖マラソンで出展とお手伝い
7 月 8 日	がいなんよ大学 in のむら 第 12 講を実施
9 月 17 日	がいなんよ大学 in のむら 第 13 講を実施
11 月 12 日	がいなんよ大学 in のむら 第 14 講を実施
11 月 28 日 29 日	乙亥大相撲のお手伝い
2024 年 1 月 20 日	第 8 回地域教育実践南予ブロック集会に参加し学生が中心となって「地域内外の若者が共創する防災教育—大学生伴走者が見た西予市と久慈市における高校生の交流から—」というテーマで発表を行った。
1 月 29 日	OOS 協定シンポジウムに NEO のむらの愛媛大学社会共創学部と野村地域自治振興協議会が参加し、能登半島の酒蔵復興支援の「青い酒募金」を行った。
3 月 17 日	がいなんよ大学 in のむら 第 15 講を実施
3 月 23 日	大阪モノレール株式会社と共催でお花見列車を運行し、復興支援酒「緒方洪庵」を提供する予定。



西予市地域貢献研究事業に応募し、「被災地における若者の体験伝承意識に関する比較研究」という研究テーマで採択され、その研究成果は、研究成果報告書にまとめた。

◎哲学の実験オープンラボ 担当教員：野尻 英一

ウェブサイト：「哲学の実験オープンラボ」web サイト

<https://exphopenlabo.hus.osaka-u.ac.jp>

社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：10 件／参加者 100 人

2023 年度は、ラボ公認プロジェクトとして 8 つのプロジェクト（ラカンと現代社会研究会、マイクロアグレッション関連読書会、マルクス主義的社会理論研究会、現代思想におけるハイデガー研究会、美的近代研究プロジェクト、人類学基礎勉強会、RadioPiXOL、ジジェク研究会）が実施され、昨年度より 2 件増えた。またラボ公式イベントとしては 4 件が行われた（「松本卓也 講演会：生き延びの誕生——垂直から水平へ」「シンポジウム：思想と精神分析」「岩田慶治：「京都学派およびポスト京都学派」という文脈において」「京都学派およびポスト京都学派と科学哲学・技術哲学の現在」）。さらに企業との連携としてインターンシップ 1 件（株式会社レイ・クリエーション）が実施された。

特にラボ公式ラジオ放送 Radio PiXOL「テツガクシャの御用聞き」は「テツガクへの期待篇」（全 9 回）として、哲学を学ぶ社会人サークル活動をしている方たちを多数ゲストにお招きし、お話を聞くことができた。

◎地域の食とプラネタリーヘルス 担当教員：木村 友美

ウェブサイト：<https://localfoodlab-ph.org/>

社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：3 件／参加者 15 人

国際シンポジウムの件数と参加人数：1 件／参加者 27 人

本プロジェクトは、地域に根ざした食の探究を通じて、人と環境の双方の「健康」を目指す「プラネタリーヘルス」の実践にむけた学びと発信を行うことを目的に、2022 年度より活動を開始した。「地域の食」を探究するうえで、調査地としたのは瀬戸内地域である。瀬戸内地域は、その自然豊かな景観をもつ一方、高度経済成長期の工場誘致の加速によって工業地帯周辺で環境汚染が深刻化した歴史もあり、環境保全の観点から、日本で初めての国立公園に指定された地域でもある。そして、近年では芸術祭などのイベントも取り入れながら、観光による地域創生が活発になされている。

今年度は瀬戸内地域の3か所（岡山県玉野市、香川県直島町、広島県周防大島町）への共創フィールドワークを実施した。共創フィールドワークは、地域の人々（本プロジェクトでは、食に関わる団体や市民）とともに探求し、学びあう形で行われた。

■ フィールドワーク参加学生数：11 人

■ 協力団体

- ・岡山県玉野市観光協会
- ・一般社団法人瀬戸内 RE・SORT
- ・一般社団法人全日本伝統文化後継者育成支援協会
- ・一般社団法人デスティネーションセとうち

■ 国際イベント

「ヒマラヤと瀬戸内から考えるプラネタリーヘルス」

日 時：2024 年 1 月 16 日 13:00～16:00

場 所：国立民族学博物館 第 3 セミナー室

参加者：インド・ラダック地域の NPO ジュレーラダックから 4 名が来日、

研究者（中国、インドネシアなど含む）16 名、学生・留学生、一般参加合わせて 27 人

■ アウトプット

ジャーナル『未来共創』11 号において報告を出版予定。

◎全国人間科学系部局連携ネットワークの連携と活動継続化

担当教員：渥美 公秀

社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：1 件／参加者：100 人

全国人間科学系部局連携ネットワークの参加大学による全体会議を 3 回開催し、年次活動について検討した。

実施した活動は以下の 3 件である。

1) 会報『人間科学』創刊号の発行

2023 年 12 月に 25 ページ、カラー版 pdf にて刊行し、参加大学に配布し、あわせてウェブ公開した。

2) ウェブサイトの作成と公開

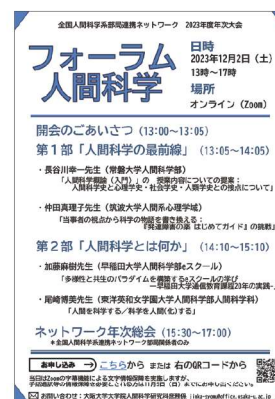
ネットワークの公式ウェブサイトを作成した（年度末に公開予定）。

3) 第 2 回フォーラム人間科学（年次総会）の開催

2023 年 12 月 2 日にオンラインで開催した。第 1 部「人間科学



の最前線」、第2部「人間科学とは何か」では4件の研究報告がなされ、一般参加を含めた約100名の参加者があった。その後、第3部として参加大学による年次総会を開催した。



◎縮退社会ラボ 担当教員：情報科学研究科 村田 忠彦

ウェブサイト：2023年9月26日 新潟県加茂市プレスリリース
加茂市での活動が市のホームページで公開されました。



社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：7件／参加者122人



加茂市でのワークショップ風景

本オープンプロジェクトは、現代社会を成長発展社会と捉えるのではなく、少子高齢過疎化など縮退を余儀なくされている社会～縮退社会～と捉え、「尊厳ある縮退」をキーワードとして、縮退社会におけるコミュニティの変容過程、および、住民や社会の縮退に対する受容過程を検討し、尊厳ある縮退を実現するための実践的方略を導出する。尊厳ある縮退同好会を拠点として、先行研究を基にした概念整理、事例収集、過疎地、および、都市部の人口減少地域へのフィールドワーク、人口シミュレーションなどを実施してきた。プロジェクト代表者の村田忠彦は現在、JST 未来社会創造事業デジタル社会実験プロジェクトにおいて、京都府八幡市、新潟県加茂市を対象としたデジタル社会実験の構築を行っており、2023年度は両市の市職員と会合を重ね、人口減少に直面する自治体のニーズ把握を行ってきた。JSTのプロジェクトでの研究成果を日本国内の他の地域に展開するために、縮退社会ラボの枠組みで検討を重ねている。

オープンプロジェクト研究会

第1回：『アイスブレイクミーティング』

全参加者（人間科学研究科、サイバーメディアセンター）

2023年7月13日（オンライン）

第2回：『リアルスケール社会シミュレーションの可能性』

村田忠彦（サイバーメディアセンター・情報科学研究科）

2023年8月30日（サイバーメディアセンター・1F commons）

第3回：『「尊厳ある死」をめぐる言説構造とその罟』安藤泰至（鳥取大学医学部）

2023年10月19日（人間科学部本館42教室）

共催：尊厳ある縮退同好会

第4回：『JST 未来社会創造事業における自治体ヒアリング結果』

村田忠彦（サイバーメディアセンター・情報科学研究科）

2024年3月中を予定

現地ワークショップ（WS）

京都府八幡市

2023年4月6日	課題洗い出しWS（15人）
2023年6月1日	課題解決アイデア検討WS（15人）
2023年7月10日	市内視察（17人）
2023年12月4日	新市長への報告と今後の進め方（8人）

新潟県加茂市

2023年6月29日	健康ポイント事業に関するWS（23人）
2023年8月31日	ワークショップ結果報告会（22人）
2023年12月21日	課題抽出に関するWS（22人）

◎災間社会ラボ 担当教員：宮本 匠

ウェブサイト：一般社団法人おもやいのウェブサイト <https://omoyai.org/>

社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：2件／参加者60人

2019年、2021年と続けて水害に見舞われた佐賀県武雄市において、2019年の水害後に活動をはじめた「一般社団法人おもやい」の活動への参与観察を通じて、災間社会における市民協働のあり方について調査を行った。今年度は、現地訪問を行い、おもやいにかかわる人々に集ってもらって、日ごろの活動の中で感じていることを短文の「独り言」として表現し、共有する取り組みを行った。また、2023年12月12日には、人間科学にて、おもやいのスタッフ2人をゲストに、MeWプロジェクトと共催で、「災間の被災地の市民協働を考えるセミナー」を開催し、災間社会において「生活困窮」にあるような方々をどう支えるか、またそれを「支援」ではなく、ご近所どうしの「たすけあい」として、支えあっていくとはどのようなことなのかについて、具体例を交えながら紹介いただき、議論を深めた。



MeWプロジェクトと共催した
「災間の被災地の市民協働を考えるセミナー」
2023年12月12日 於・大阪大学人間科学部

◎みんなの フィールド エソロジー ラボ 担当教員：山田 一憲

ウェブサイト：朝日新聞EduA

<https://www.asahi.com/edua/ricle/14909967>

岡山県立勝山高等学校HP

<https://www.katuyama.okayama-c.ed.jp/>

2024/01/23/%e7%a5%9e%e5%ba%ad%e3%81%ae%e6%bb%9d-%e3%82%b5%e3%83%ab%e8%a6%b3%e5%af%9f%e4%bc%9a%e3%82%92%e8%a1%8c%e3%81%84%e3%81%be%e3%81%97%e3%81%9f%ef%bc%81/

比較行動学研究分野HP

<https://ethology-osaka.tumblr.com/>

post/733468644323033088/%E5%8F%82%E5%8A%A0%E8%80%85

<https://ethology-osaka.tumblr.com/post/733468652106563584/%E6%B7%A1%E8%B7%AF%E3%82%B6%E3%83%AB%E8%A6%B3%E5%AF%9F%E4%BC%9A2023%E5%B9%B4%E6%9C%88%E6%97%A5>

<https://ethology-osaka.tumblr.com/post/741588431347548160/%E3%82%B5%E3%83%AB%E3%82%B5%E3%83%9F%E3%83%83%E3%83%882023-%E5%86%AC%E3%81%AE%E9%99%A3-vol2-%E7%A5%9E%E5%BA%AD%E3%81%AE%E6%BB%9D%E3%81%A7%E3%82%B5%E3%83%AB%E3%82%92%E8%A6%B3%E5%AF%9F%E3%81%97%E3%82%88%E3%81%86>

<https://ethology-osaka.tumblr.com/post/742914001362731008/%E7%A0%94%E7%A9%B6%E6%88%90%E6%9E%9C%E7%99%BA%E8%A1%A8%E4%BC%9A-2024-%E4%B8%80%E8%88%AC%E7%A4%BE%E5%9B%A3%E6%B3%95%E4%BA%BA%E6%B7%A1%E8%B7%AF%E3%82%B6%E3%83%AB%E8%A6%B3%E5%AF%9F%E5%85%AC%E8%8B%91-%E5%A4%A7%E9%98%AA%E5%A4%A7%E4%BA%BA%E9%96%93%E7%A7%91%E5%AD%A6%E9%83%A8%E6%AF%94%E8%BC%83%E8%A1%8C%E5%8B%95%E5%AD%A6%E7%A0%94%E7%A9%B6%E5%AE%A4>

社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：12 件／参加者 1,800 人

動物、動物の管理者、研究者、学生、一般来園者が、野猿公苑と動物園をフィールドとして、比較行動学に基づいた交流を行うことを目指している。目標はフィールドでそれぞれが「新しい役割」で他者と接することにあり、「教えながら学ぶ」は本プロジェクトの一つの柱である。以下のイベントにおいて、一般市民を対象に「ニホンザルの行動」と「行動観察法」の紹介を学部生や大学院生が行った。

- ① 7 月 22-23 日に科学技術館で開催された「博物ふえすていばる！9」にて、大学院生が行動観察法の紹介を行った。395 名の訪問者に「行動観察のしおり」を配布した。
- ② 10 月 7-8 日に京都市勤業館みやこめっせで開催された「いきもにあ 2023」にて、大学院生が行動観察体験を提供した。270 名の訪問者があった。
- ③ 11 月 18-19 日に大阪市立自然史博物館で開催された「大阪自然史フェスティバル 2023」にて、大学院生が行動観察体験を提供した。300 名の訪問者があった。
- ④ 2 月 17 日「研究成果発表会 2024～淡路ザル観察公苑&大阪大学 人間科学部～」を開催し、フィールドワークによって書き上げた卒業論文の成果を、野猿公苑の管理者、ボランティア、来園者の方々にフィードバックするオンライン報告会を開催した。視聴回数は 968 回、ユニーク視聴者数は 564 名、約 200 名の参加者が 1 時間の報告会に最後まで参加した。

一般市民、高校生、大学院生、研究者を、研究フィールドに招き、野生ニホンザルの観察会を開催した。

- ⑤ 7 月 10 日に淡路島モンキーセンター（兵庫県洲本市）で観察会を行った。一般市民と大学院生と野猿公苑管理者の交流を通して、野猿公苑の未来について意見交換を行った。25 名が参加した。
- ⑥ 7 月 26 日に神庭の滝自然公園（岡山県真庭市）に岡山県立岡山一宮高等学校の 1 年生を招き、大学院生と一緒にニホンザルの生態を解説し、糞と食痕探しを行った。74 名の参加があった。
- ⑦ 9 月 4 日に淡路島モンキーセンターで観察会を行った。④の観察会がすぐに定員に達してしまったため、イベントに参加できなかった一般市民を対象とした追加開催だった。個体識別体験や研究者が行っている認知実験を行い、解説を行った。27 名の参加があった。

岡山県立勝山高等学校の 1-2 年生を対象に、大学院生がニホンザルの行動と社会、そして行動観察法を教える講習会を 3 度開催し、ニホンザルの観察に必要な知識を高校生に伝えた。その後、真庭市立勝山小学校の児童をフィールドに招き、事前学習した高校生がザルの観察法を小学生に教える観察会を開催した。

- ⑧ 8月2日に岡山県立勝山高等学校の2年生を対象に、大学院生が「ニホンザルの社会」と「行動観察法」について事前学習となる講義を行った。9名の参加があった。
- ⑨ 12月28日に岡山県立勝山高等学校の1-2年生を神庭の滝自然公園に招き、「ニホンザルの糞と食痕探し」の観察会を行った。25名の参加があった。
- ⑩ 12月28日に岡山県立勝山高等学校において、1-2年生を対象として「行動観察法」と「ニホンザルの毛づくろいと利他行動」「ニホンザルの管理」について、事前学習となる講義を行った。25名の参加があった。
- ⑪ 1月15日にオンラインにて岡山県立勝山高等学校の1-2年生を対象に、「行動観察法」に関する事前学習を大学院生が実施した。12名の参加があった。
- ⑫ 1月23日に神庭の滝自然公園にて、観察会を実施した。事前学習を積んできた岡山県立勝山高等学校の1-2年生が、真庭市立勝山小学校の3年生を対象に、「ニホンザルの毛づくろいと社会」「ニホンザルの管理」について解説を行い、小学生と一緒に定量的な行動観察を行った。74名の参加があった。

本企画には共育の視点の実践（真庭市総合教育大綱）という以下の3つのねらいがあった。

- 【協育】教えながら学ぶ：小学生に高校生が教える。高校生に大学院生が教える。
- 【郷育】郷土の誇りである神庭の滝とサルを知ってもらう：滝の職員さんが一生懸命に神庭のサルの管理をされていることを学ぶ。地域に暮らすサルのことを知って、昔から続いてきたサルと人間の共生を考える。
- 【響育】サルには1頭1頭異なる個性があることを知り、サルとヒトの共通点と相違点を理解して、人間について理解を深める：「大人って何だろう？」「親ってなんだろう？」「人間はなぜ社会を作っているのだろうか？」。

行動観察を通じて野生動物とヒトの共生を目指す取り組みが、朝日新聞 EduA に掲載された。



◎「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ」（記憶の継承ラボ）

担当教員：三好 恵真子

ウェブサイト：

【プロジェクト公式HP】

大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクト

「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ」HP

<https://relay-memories.hus.osaka-u.ac.jp/>

【WEB 掲載】

中谷碩岐（共生の人間学M1）「REPORT【記憶の継承ラボ】

「出来事の記録と生の記憶 クロード・ランズマン『SHOAH』をみる」開催報告」

<https://www.hus.osaka-u.ac.jp/mirai-kyoso/ja/reports/240208a/>

吉成哲平「REPORT【記憶の継承ラボ】「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ」開催報告」

<https://www.hus.osaka-u.ac.jp/mirai-kyoso/ja/reports/231220a/>

三好恵真子「他者と「共にある」ということ-ポスト体験時代の記憶の継承に向けて-」

（大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・コラム）

<https://www.gjs.osaka-u.ac.jp/column/2023/3646/>

吉成哲平「いつからが「戦後」なのだろう——写真家たちが見つめた暮らしから辿り直す」

（世界思想社 WEB マガジン「せかいしろう」連載：「ガクモンをめ」第 3 回）

<https://web.sekaishisoshia.jp/posts/7347>

【新聞報道】

「長崎原爆 78 年 祈り 尽きぬ思い」『読売新聞』（西部朝刊）2023 年 8 月 10 日付（取材協力）

【ブックレット】

三好恵真子・吉成哲平編『記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ』（「21世紀課題群と東アジアの新環境」シンポジウムシリーズ②）『OUFC Booklet Vol.18（ISSN 2187-6487（オンライン））、2024 年 3 月、印刷中

【論文】

王石諾・三好恵真子「結婚移民として日中「二つの東北」を生きる中国人女性の歴史実践—ライフストーリーから読み解かれる「満洲」記憶—」『生活学論叢』43、28-42、2023 年

吉成哲平・三好恵真子「私性」から「公性」へと拓かれてゆく「写真実践」—復帰前後の沖縄での表現を巡る東松照明の模索—」『生活学論叢』43、43-57、2023 年

張曼青・三好恵真子「社会転換の荒波を生きる中国農民の「農」をめぐる葛藤と主体的な選択—施肥に関するライフストーリーから読み解くもう一つの農民像—」『生活学論叢』42、15-28、2023 年

張曼青・胡毓瑜・三好恵真子「新中国建国後の肥料農法の漸進的な転換と農民の主体性—「土化肥」の使用を基軸とした考察—」『村落社会研究ジャーナル』29(2)、13-24、2023 年 等

【学会発表】

日本生活学会、日本現代中国学会、日本オーラルヒストリー学会、社会文化学会等にて発表

社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：6 件（長崎訪問：3 回、沖縄・水俣・福島訪問：各 1 回）／参加者 60 人（現地での交流を含む）

国際シンポジウムの件数と参加人数：2 件（「記憶の継承」シンポジウム、「SHOAH」シンポジウム）／参加者 155 人（「記憶の継承」シンポジウム：101 名（述べ参加者 147 名）、「SHOAH」シンポジウム：54 名）

終わりの見えないウクライナ侵攻とその後の混迷が続く昨今、常に戦いの犠牲となるのは、日常を生きる市井の人々であることを改めて思い知ることになった。戦後 70 数年を経て風化が進むこれらアジア・太平洋戦争を巡る体験と記憶は、戦争体験者の直接的な証言が聞き取れなくなる「ポスト体験時代」へ突入しつつある今日、未来世代への継承が喫緊の課題となっており、また人々が暮らしの中で直面してきた現実を、「戦後日本」だけに留まらず、東アジア全体が経験してきた歴史の文脈の中に位置付け、今日への連続性を問い直してゆくことにも目を向ける必要性が浮かびあがる。

そこで、これまで研究代表者らが 2007 年より主宰してきた 10 数年にわたる東アジアにおける国境を越えた学術交流の実績を糧としながら、今年度、「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ」（記憶の継承ラボ）を新たに立ち上げた。このラボでは特に次世代を担う学生たちの主体性に期待しながら、長崎、沖縄、福島、水俣など各地において日々平和活動に尽力されている現場の人々との交流活動を通じて、アジア地域史の視座から戦争・戦後体験の意味を問い、未来への展望を描いていくために、国境を越えた対話（グローバル・ダイアログ）と連帯への可能性を生活の次元から模索することを目指している。以下、本年度の活動内容の概要を紹介していく。

【シンポジウム「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログの開催」】

2023年10月28日（土）に、「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ」（主催：IMPACT オープンプロジェクト「記憶の継承ラボ」；大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト「21世紀課題群と東アジアの新環境:実践志向型地域研究の拠点構築」、共催：城山小学校被爆校舎平和発信協議会；大阪大学中国文化フォーラム）をオンラインにて開催した。これまで私たちが長崎、沖縄、福島、水俣などの各地の実践家との出会いから学びを深めてきた戦争・戦後体験とその記憶の未来への継承について、院生による研究成果報告と現地での記録写真を併せた応答を行うと共に、被爆校舎から原爆体験を伝え継ぐ長崎城山小学校平和祈念館の実践家の方々をお招きし、その取り組みについての貴重なお話を頂いた（写真1）。当日は休日にも関わらず、学内外から100名以上の方々に参加して頂くことが出来た。本シンポジウムの総括は、本年度末に発刊予定の成果物（OUFC booklet No.18）としてまとめている。



写真1 長崎城山小学校平和祈念館
（2021年3月吉成哲平さん（環境行動学・博士
後期課程/リサーチアシスタント）撮影）

【「記憶の継承」ラボ共催シンポジウム

「出来事の記録と生の記憶 クロード・ランズマン『SHOAH』をみる」の開催】

2024年2月4日（日）に、大阪大学人間科学研究科共生の人間学研究室を主催とし、「記憶の継承」ラボとの共催イベントとしてシンポジウム「出来事の記録と生の記憶 クロード・ランズマン『SHOAH』をみる」を開催した。院生や若手研究者による4つの関連報告を基軸に、当日は対面会場とオンラインを併せて50名以上の方々に参加頂いた。『SHOAH』が提起する「表象不可能な出来事をいかにして引き受けるのか」という問いを巡り、哲学、映画、記録実践の観点から長時間にわたる活発な議論が展開され、盛況のうちにシンポジウムを終えることが出来た。本シンポジウムの総括もブックレットとしての刊行を検討している。

【長崎訪問（2023/8/7-8/10、10/18-10/19、2024/1/18-19）】

上述の「記憶の継承ラボ」主催のシンポジウム「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ」では現場の声を広く一般にも共有していく試みを企画し、これまで私たちが長崎の原爆体験について学び交流を深めていた城山小学校平和祈念館の実践家の方々に登壇を依頼し、快諾を頂いた。それを踏まえ院生たちが「長崎原爆の日」の前後の2023年8月に長崎を訪問した際には、長崎の街をご案内頂きつつ、市内に残る原爆遺跡に加え、長崎の中の中国文化について丁寧に解説して頂いた。

また、シンポジウム直前の10月の訪問では、シンポジウム第2部②「現場からのレスポンス「長崎の平和活動に込める願い」」にて発表頂く内容を最終調整し、当日、長崎からオンラインで登壇頂くための機材の設営を行った。そして、シンポジウム開催後の今年1月には、その成果報告として今年度末に刊行予定のブックレットに向けて、10月末のシンポジウムで発表頂いた内容の原稿に関する最終確認を行うとともに、平和活動の勉強会にも参加することができた。

【沖縄訪問（2023/11/10-14）】

沖縄戦と戦後の沖縄が直面する現実について現場で学ぶために、2023年11月に沖縄を訪問し、南部の沖縄戦の戦跡を中心に、沖縄戦を巡る体験の継承とその複雑さについて理解を深めた。滞在中には、沖縄市戦後文化資料展示館ヒストリートも訪問し、沖縄市の市史編集に携わっている職員の方とコザの戦後史に関して学術交流を行い、アジア地域史の視点から戦争・戦後体験を捉え直していく重要性を共有した。

【水俣訪問（2023/12/8-10）】

水俣病の経験が現場でいかに伝え継がれているのかを学ぶために、2023年12月に水俣を訪問した。滞在中、水俣病センター相思社の職員の方による水俣案内と相思社に併設された水俣病歴史考証館への訪問を通じて、水俣病事件の歴史と現状に関する学習と意見交換を行った。「記憶の継承ラボ」のメンバー各自の研究内容を踏まえ、水俣病事件から東アジアを射程に捉えた近代史を問い直していく重要性を議論した。

【福島訪問（2024/2/16-19）】

東日本大震災と福島原発事故に伴う複合災害を経験し、復興の途上にある福島において、震災経験とその記憶が暮らしの中でいかに継承されているのかを学ぶため、2024年2月に福島県双葉郡を中心とする地域（福島県いわき震災伝承みらい館、東日本大震災・原子力災害伝承館および震災遺構・浪江町立請戸小学校等）を訪問した（写真2）。訪問中、現地の語り部の方々から震災当時の経験と復興を巡る複雑な胸中を伺う中で、3.11が複合災害であったがゆえの各地域での一様ではない震災経験を学ぶと同時に、その背景としての福島に原発が建設されてきた戦後史を踏まえ、前述した沖縄や水俣へも通底する構造的要因にも目を向けるべき重要性を受け止めた。



写真2 福島県富岡町・結まーるの見晴台から望む海
(2024年2月吉成哲平さん(環境行動学・博士後期課程/リサーチアシスタント)撮影)

◎プロジェクト SOUP (Share Our Unique Perspectives)

担当教員：安元 佐織

社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：5件（うち2件は、毎月1回開催）／
参加者 70人程



2月9日舞阪協働センター

「プロジェクト SOUP」は、人間科学研究科の学生に部局内外での多文化交流の場を提供することで、学内での学びと社会を繋ぐ Public Sociology（公共社会学）の実現を目指しています。本年度は、プロジェクトメンバーが自分たちとは異なる視点を持つ人々と実際に対話する機会を持つことで、多文化共生社会の課題を考えることを目標としました。人科留学生も積極的に参加しています。具体的には、下記の5つの企画を開催しました。①人科生交流企画：人科1回生から博士後期課程の学生が毎月1回集い、映画鑑賞や学生生活についての意見交換をしています。②地域高齢者との世代間交流企画@吹田市：グローバルビレッジ津雲台の高齢者住宅で毎月1回開催している、人科生と高齢者との交流企画です。③地域高齢者との世代間交流企画@浜松市：2024年2月9日に漁師町の高齢者との交流企画を開催しました。④地域住民との世代間交流企画@伊丹市：2023年9月10日に幅広い年齢の地域の方々と交流企画を開催しました。⑤地域住民との国際交流企画：岸边にある高齢者住宅で毎月1回英会話教室を開催しています。



グローバルビレッジ高齢者住宅

◎対話で進めるディスアビリティ・インクルージョン 担当教員：中井 好男

社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：8 件／参加者 280 人＋ 40 名見込み
(3 月開催予定の手話カフェと合作俳句)



喜多さんランチトーク

本プロジェクトの目的は、共生の基盤となる対話の機会を設けることにあった。今年度は、言語文化的特性や障害によって生じる多様性との接点を創出することを目指し、①ことばの能力に関するシンポジウム（1 回）、②障害者の方々が作るパンを販売する DE&I カフェ（2 回）、③障害者支援に取り組む実践家とのランチトーク（1 回）、④視覚言語である手話やそれによって育まれるろう文化に触れる手話カフェ（3 回）を行った。また、⑤として、俳人であり障害者支援に従事する障害者と詩人として地域創生に関わる実業家とともに障害や芸術を通して人の生を考える合作俳句会（1 回）を 3 月 15 日に行う予定をしている。まず、シンポジウムでは教育や研究に携わる方々だけではなく、高校生を含めた学生さんの参加もあり、様々な立場から捉えたことばと対話の様相を共有することで、共生に求められる対話とは何かを議論することができた。次に、DE&I カフェでは、パンという食を通して、障害者・非障害者がともに従事する社会活動に参加することとその普遍性についての気づきを促すことができたのではないかと考えている。また、DE&I カフェでは、障害者支援に携わる実践家によるランチトークを開催し、実践家としての思いや現場の課題などを知る場を設けた。ランチトークの際は、上記のパンに加えて、登壇者が携わる障害者就労支援の一環として生産されているチョコレートの販売も行った。実践家と話し合う場は、障害の有無を乗り越えた社会創出の意義や関わり方について、より具体性を持って考える機会となった。一方で、2 回実施した（3 月 19 日に 3 回目を予定）手話カフェでは、障害当事者と直接コミュニケーションをとることで、障害を概念だけで理解するのではなく、聴覚障害者の言語である手話やろう文化についても学べる環境を作ることができた。手話講師の方が音声に頼らず視覚によって世界を捉え、コミュニケーションを取ることを体験する場を提供してくださったが、今後もこの手話カフェを定期的で開催することで、学生主体のサークルなどへの発展と定着化を期待しているところである。最後に、合作俳句会であるが、この報告書作成後の開催であることから、別途その内容や成果について報告申し上げる予定である。



第 1 回 手話カフェ



第 2 回 手話カフェ

◎多様性の中のウェルビーイング 担当教員：山田 陽子

ウェブサイト：添付のフライヤー参照

社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：1件／参加者 60人

職場・働き方の多様性とウェルビーイングについて考える一般向けのイベント、「多様性の中のウェルビーイングー芸術・雇用・社会」を2024年3月20日（水・祝）に大阪大学中之島センター10階佐治敬三メモリアルホールにて開催する。

本イベントの準備段階では、国際障害者センタービッグアイのほか、重度心身障害者施設に赴き、障害者の方が作業療法士や理学療法士の方とともに絵画を描いていく過程を視察した。また、障害者アートの専門家や、画家として活躍する方から、作品の芸術としての価値や、アートを介した障害者雇用の現状についてレクチャーを複数回にわたって受けた。

イベントでは、絵画の展示とダンサーによるパフォーマンスをライブで鑑賞した後、芸術と障害者雇用、職場や働き方の多様性とウェルビーイングについて、未来共創センターと他部局、外部団体との連携のもとに議論する機会を設ける。

大阪大学人間科学研究科未来共創センター IMPACT オープンプロジェクト

多様性の中のウェルビーイング

ー芸術・雇用・社会

2024年3月20日[水・祝]
14:00-17:00

大阪大学中之島センター10階
佐治敬三メモリアルホール

- ▶ 障害のある方が表現者として描く絵画や、ダンスパフォーマンスを鑑賞し、共有します
- ▶ 芸術を媒介とした雇用の可能性と、その社会的仕組みづくりについて議論します
- ▶ 職場・働き方の多様性とウェルビーイングについて考えます

ダンサー 森田かずよ

参加無料
要申込

主催 大阪大学人間科学研究科未来共創センターIMPACTオープンプロジェクト「多様性の中のウェルビーイング」(代表 山田陽子)
共催 国際障害者交流センター ビッグアイ、大阪府、大阪大学中之島芸術センター、大阪大学UNESCO Chair



プログラム

- 14:00 挨拶 渥美公秀（大阪大学人間科学研究科長）
- 14:10 趣旨説明 山田陽子（大阪大学）
- 14:20 アート作品紹介
鈴木京子（国際障害者交流センタービッグアイ副館長）
- 14:50 ダンスパフォーマンス「アルクアシタ」
森田かずよ（Performance For All People.CONVEY 主宰）
- 15:30 ディスカッション・全体討論
登壇者：永田靖（大阪大学中之島芸術センター副センター長）、
鈴木京子、森田かずよ、山中浩司（大阪大学）
司会：山田陽子

登壇者プロフィール（敬称略・五十音順）

鈴木京子

国際障害者交流センタービッグ・アイ 副館長、アーツ・エグゼクティブプロデューサー。
障害のある人が舞台芸術に表現者・鑑賞者として参加する舞台の企画・制作や、全国の劇場・音楽堂等の研修会講師、企画・制作等のコーディネートを行う。
特定非営利活動法人CUE-Arts 理事
文化庁・厚生労働省「障害者の芸術活動への支援を推進するための懇談会」委員
大阪府「文化芸術振興会」委員
『インクルーシブアートを目標として障害者差別解消法で劇場はどうか？』（ビレッジプレス）

永田靖

大阪大学中之島芸術センター副センター長、大阪大学副学長、大阪大学総合学術博物館長、日本演劇学会会長、IFTR（国際演劇学会）Asian Theatre WG Convenerなどを歴任。専門は演劇学、20世紀演劇史と演劇理論。主として日本の近現代演劇や現代アジア演劇のドラマ論研究やインターカルチュラルリズムの研究、ロシア・アヴァンギャルド演劇の演技論研究などを通して、近代演劇やその演劇史記述のトータルな再検討を行う。また近年のパフォーマンス研究を含む演劇研究方法に関心を寄せ、近隣の自治体や諸機関と共同で演劇実践方法やその文化政策の研究を行う。

森田かずよ

「Performance For All People.CONVEY」主宰、「二分音階症・側鎖症」を持って生まれ、18歳より表現の世界へ、自らの身体の可能性を日々楽しく考えながら、ダンサー、俳優として活動。ヨコハマ・パトリエンサー、国民文化祭、庭劇団ベニノ、アジア太平洋障害者芸術祭など国内外の多数の公演に出演し、TVなどメディア出演も多数
東京2020パラリンピック開会式にソロダンサーとして出演
第11回九州&アジア全国洋舞コンクール バリアフリー部門1位
PERSOL World-Style AWARD 2020 ダイバーシティ部門受賞
神戸大学人間発達環境学研究科にて修士号

専門スタッフ：上岡亜希（ビッグアイ）、正井佐知（人と防災未来センター）、杉江美子（帝塚山学院大学）、
古川由志（大阪大学）、五井敏太（日本学術振興会）、川本彩花（大阪経済大学）、久保田理（大阪大学大学院）

4 研究事業

◆4.1 研究事業

未来共創センター「テーマ研究会」

未来共創センターでは、毎年テーマを決めて、そのテーマに関心のある教員や学生を募集して研究会を実施しています。2023年度は「学際研究として挑む「月経」」をテーマとしました。近年、「生理の貧困」に代表されるように、月経をめぐる諸々の問題が国際的にも注目される中、研究会では人間科学研究科の多様な研究および実践の事例をもちよりながら、月経をめぐる諸々の問題に、さまざまな角度から切り込んで議論を交わしました。研究会での発表者と発表内容は、下記の通りです。

三橋 涼子、伊藤 美穂、尾崎 昌代、倪婷婷（社会学・人間学系、共生学系、医学系）

「高齢女性の月経に関する経験と社会観についての語り」

陸口 雄斗、三浦 遥、西村 尋、YUN YAJ ING、宮本 幸乃（共生学系、教育学系、行動学系）

「男子学生の月経観に関するインタビューデータの報告

～当事者/非当事者の視点で捉えた男子学生の月経観～」

池端 祐一朗（共生学系）

「カトリックの教説と月経――タブー・中絶・避妊と月経」

小塩 若菜（共生学系）

「高校生の月経対処からみる日本の月経教育―大阪の教師と生徒の語りから―」

◆4.2 ジャーナル『未来共創』の発刊

2023年度はジャーナル『未来共創』第11号を発刊しました。本誌の前身である『未来共生学』は、2012年に始まった文部科学省博士課程教育リーディングプログラム「未来共生イノベーター博士課程プログラム」のジャーナルとして創刊されました。ジャーナル『未来共創』第11号には論文2本、特集（論文4本）、報告2本、書評2本、エッセイ1本が掲載されています。特集「学際研究として「挑む」月経」では、高校生、男子学生、高齢女性、カトリックの教説といった、様々な領域における月経をめぐる問題に切り込んだ論文をご寄稿いただきました。

ジャーナル『未来共創』第11号 目次

発刊にあたって	村上靖彦
《論文》	
互惠性の負の連鎖—不公正な扱いを受けると第三者にも不公正な扱いをするのか？—仁科国志・川邊華麟・戴宇熙・武田拓海・安井優馬 西辻好花・李葎理・趙心語・三浦麻子	
中国都市化プロセスにおける都市コミュニティ、移行期コミュニティと農村コミュニティの 災害対応の比較—ソーシャル・キャピタルの有効性の違いに着目して	王藝璇
《特集 学際研究として挑む「月経」》	
特集にあたって	杉田映理・小泉空
高校生の月経対処からみる日本の月経教育の課題—大阪の教師と生徒の語りから—小塩若菜・杉田映理	
男子学生における月経との関わりと月経観の形成陸口雄斗・三浦遥・西村尋・YUN YAJ ING・宮本幸乃	
月経と月経をめぐる経験を通して見る社会—高齢女性の語りから—三橋涼子・伊藤美穂・尾崎昌代・倪婷婷	
カトリックの教説と月経—タブー・中絶・避妊と月経	池端祐一朗
《報告》	
鹿児島県鹿屋市での PBL 活動報告—大阪大学を起点とした学生×社会人活動の実践—中野立開	
プラネタリーヘルスの実践と課題—ヒマラヤと瀬戸内から考える木村友美・斎藤優久乃・伊東実穂	
《書評》	
フェリッペ・モッタ『移民が移民を考える—半田知雄と日系ブラジル社会の歴史叙述—』 初版、大阪大学出版会	鈴鹿翔大
“Tine Rostgaard, John Parsons and Hanne Tuntland (eds.), 『Reablement in Long-Term Care for Older People International Perspective and Future Directions』 Bristol University Press	久保田怜
《エッセイ》	
コートジボワールで長期休暇中に技能を身につける子どもたち 学校に通わせ続けることは正しい開発目標なのだろうか？	澤村信英
編集後記	小泉空



5 教育事業

◆5.1 未来共創センター担当授業

未来共創センターでは、下記の授業を担当しています。

(1) フィールド科目

【学部】未来共創フィールド実習Ⅰ 春～夏学期

【学部】未来共創フィールド実習Ⅱ 秋～冬学期

【博士前期課程】未来共創フィールドスタディⅠ 春～夏学期

【博士前期課程】未来共創フィールドスタディⅡ 秋～冬学期

2022年度は、「未来共創フィールド実習Ⅰ」の一環として、岡山県倉敷市真備町における防災計画に関わるフィールドワークと、香川県の栗島での食のフィールドワークを実施しました。



(2) 実践型学修活動

【学部】人間科学学際実習Ⅰ 春～夏学期

【学部】人間科学学際実習Ⅱ 秋～冬学期

【博士前期課程】総合人間科学実習Ⅰ 春～夏学期

【博士前期課程】総合人間科学実習Ⅱ 秋～冬学期

【博士後期課程】総合人間科学特別実習Ⅰ 春～夏学期

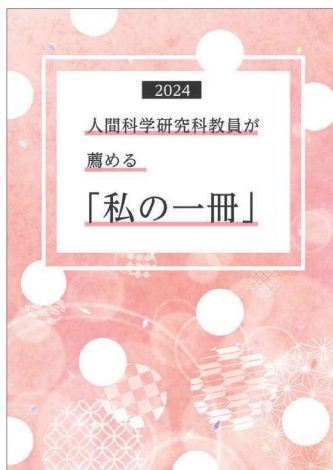
【博士後期課程】総合人間科学特別実習Ⅱ 秋～冬学期

(3) 人間科学学際研究特講

人間科学研究科の学際研究特講において、6コマ分の授業を担当しています。2022年度は、学系をこえたグループにおいて、「大阪万博でどのような共創プログラムができるか？」というお題をもとにディスカッションし、グループでのアイデアがまとめられました。



◆5.2 『私の一冊』の発行



人間科学研究科の教員が、学生に読んでもらいたい本を一冊ずつ紹介する『私の一冊』を作成し、学生に配布しました。私の一冊は、必修科目「人間科学概論」で使用され、学生たちは掲載された書籍を選んでレポートにまとめて授業で発表しました。本を通じて学生と教員がつながるきっかけとなりました。

◆5.3 講義の感想

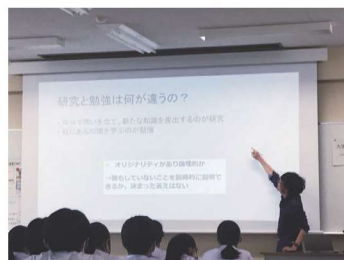
講座：大学研究と私（大学生活と研究職の魅力について）

講師名：伊藤莉央先生



私はまだ、全て自分で決めて生活を送ることができていません。大学生活は自分次第というのを聞いて、自分で動けば動く分、自分のためになるし、動かなければ後悔していくのは自分だと思いました。なら、行動力がある方が、人生勝ったなと思いました。後から後悔するなら、行動を起こす方がいいと思いました。また、私自身研究というものに対してしんどい、大変だというどちらかというネガティブなイメージがありました。しかし、今日先生のお話を聞いて、しんどい分だけそこに魅力があるんだと思いました。より探究心が燃えてきたり、喜びを感じたり、たくさんの魅力があるんだと思います。大学生活でどれだけ自分から行動を起こせるかで、社会に自分が出たときの自信や心は変わっているのだらうなと思います。何もできなかった、やろうとしてやらないままだったという大学生活に、したくないです。チャレンジ精神を活発にしていきたいなという風に思いました。とても面白いお話をして下さい、ありがとうございました。

私はまだ、全て自分で決めて生活を送ることができていません。大学生活は自分次第というのを聞いて、自分で動けば動く分、自分のためになるし、動かなければ後悔していくのは自分だと思いました。なら、行動力がある方が、人生勝ったなと思いました。後から後悔するなら、行動を起こす方がいいと思いました。また、私自身研究というものに対してしんどい、大変だというどちらかというネガティブなイメージがありました。しかし、今日先生のお話を聞いて、しんどい分だけそこに魅力があるんだと思いました。より探究心が燃えてきたり、喜びを感じたり、たくさんの魅力があるんだと思います。大学生活でどれだけ自分から行動を起こせるかで、社会に自分が出たときの自信や心は変わっているのだらうなと思います。何もできなかった、やろうとしてやらないままだったという大学生活に、したくないです。チャレンジ精神を活発にしていきたいなという風に思いました。とても面白いお話をして下さい、ありがとうございました。



6 その他の活動

日付	タイトル	演者所属	氏名	場所
2023年 6月15日	高校生への出前授業「大学と研究とわたし」	人間科学研究科未来共生プログラム	伊藤莉央	小野高等学校
2023年 9月23日	生き方死に方を考える社会フォーラム「最期に思うことー石蔵文信さんを偲ぶー」	京都産業大学、南山大学、大阪大学	伊藤公雄、阪本俊生、山中浩司ほか	中之島センター
2023年 10月27日	ふくしまスタディツアー 2023 ふくしまの復興の「今」を知る学習会	福島県企画調整部政策監	佐藤安彦	304教室、ZOOM
2023年 10月28日	記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ	人間科学研究科未来共生プログラム、ほか	人間科学研究科未来共生プログラム教員、ほか	Zoom
2023年 11月2-4日	2023 ふくしまスタディツアー	人間科学研究科未来共生プログラム、ほか	人間科学研究科未来共生プログラム教員、ほか	福島県
2023年 12月1日	ふくしまスタディツアー報告会	人間科学研究科、東北福祉大学、大阪大学 SSI、人間科学研究科未来共生プログラム	渥美公秀、石塚裕子、今井貴代子、伊藤莉央	304教室、ZOOM
2024年 2月28日	インド洋津波 20 周年 府民のための国際津波防災シンポジウム	徳島大学、筑波大学、国連 OCHA	馬場俊孝、藤野滋弘、タルミジ・モエクティジャ	Zoom
2024年 3月13日	エヴァ・イルーズ教授 来日連続セミナー	ヘブライ大学、社会科学高等研究院 EHESS	エヴァ・イルーズ教授	中之島センター
2024年 3月23日	お花見列車 お酒にまつわる大阪モノレール沿線物語			大阪モノレール

Ⅲ OOS 協定活動からのお知らせ

青い酒募金のお願い

OOS 協定を結んでいる野村地域自治振興協議会と愛媛大学社会共創学部と連携している一般社団法人 NEO のむら（緒方らぼ）では、能登半島地震で被災した能登半島の酒蔵を支援する募金をお願いしております。2024 年 1 月 29 日の OOS シンポジウムでは、OOS 連携先の愛媛大学社会共創学部の学生さんにもご協力をいただき、OOS 協定先の多くの方からご支援をいただきました。ありがとうございました。

復興支援酒「緒方洪庵」のNEOのむら



青い酒募金

主催：一般社団法人NEOのむら（N～のむら自治振、E～愛媛大学、O～大阪大学）

その先直面する生活基盤と
歴史文化の支援のために――



――まずは命をつなぐ、
生活そのものへの支援。

日本酒飲んで広げて 能登の酒蔵復興支援

2018年の西日本豪雨がきっかけとなり、新たな絆とそのシンボルとして復興支援酒「緒方洪庵（青瓶銘酒＝青い酒）」が生まれました。
私たちはお酒を飲む（もしくはお酒を知人に送る）ことで、被災地能登の地域に根付いた酒蔵を緊急応援し、復興に寄与したいという取り組みを開始しました。ご賛同いただけましたら、どうぞ一緒にください。

◎趣旨・理由

西日本豪雨時に愛媛県西予市野村町の老舗酒蔵を支援したことをきっかけに、私たち大阪大学人間科学研究科は同町のまちづくりに関わらせていただき、同蔵が造っていた銘酒「緒方洪庵」を大阪大学で引き継ぎました。そのなかで、日本の酒造りが古来より地域と結びつき、まちづくりの拠点となっていることを知りました。

被災した石川県能登地方は能登杜氏の発祥地で、高い技術と酒文化を今に伝いできたところ。今回の地震は、米など原材料を準備した仕込み期段階、最悪のタイミングでの被災なので、今期これからの醸造は断念せざるを得ない、中には廃業の危機にたつ蔵も少なくないのでは、と拝察し、少しでもできることはないかと以下を考えました。



◎支援の方法～日本酒飲んで広げて復興支援～

- ①まず、石川県酒造組合連合会を通じて（もしくは直接）、大きな被害を受けた能登の酒蔵15社（鳳珠酒造組合所属11蔵、七尾酒造組合所属4蔵）に支援のお金を送ります。
- ②「青い酒募金」を呼びかけ、ご賛同いただいた方の自宅やご指定の場所に、青い瓶のお酒「緒方洪庵」（1口「火入れ300ml」箱入り2本組）を送ります。何口でも可です。
- ③お酒到着後、1口につき3000円（＋送料）を払い込みください。
※寄付金控除対象にはなりません。
- ④本取りくみの収益分は全額能登支援とし①の一部に充てさせていただきます。

【ご賛同いただける方は、右のQRコードからご記入
もしくは……】

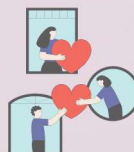
- ①お名前、②口数、
- ③払込金額（1口3000円ですが、それ以上の支援也大歓迎です）、
- ④配送先住所 を下記へのメールでお知らせください。

itou4187@yahoo.co.jp



いまはまだ生活そのものの支援が必要な段階ですが、復興の取り組みは長丁場。各地の被災地で語られてきた虚無感や喪失感に対して遠くからでもできることがあれば、と考えます。くれぐれも、ご無理なくで、どうぞよろしくお願いいたします。

一般社団法人NEOのむら 担当 理事 佐藤 功
主任経理 伊藤伸夫



『北国新聞』（石川県・1月13日）には、
「今冬の醸造、全11社「断念」 県組合連、奥能登で
聞き取り」との報道がありました。

発行
大阪大学大学院人間科学研究科
附属未来共創センター
〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-2
2024 年 5 月 31 日

編集・校正協力
特任事務職員 矢野 公子
特任研究員 小泉 空

制作・印刷
株式会社一心社



大阪大学大学院人間科学研究科

附属 **未来共創センター**